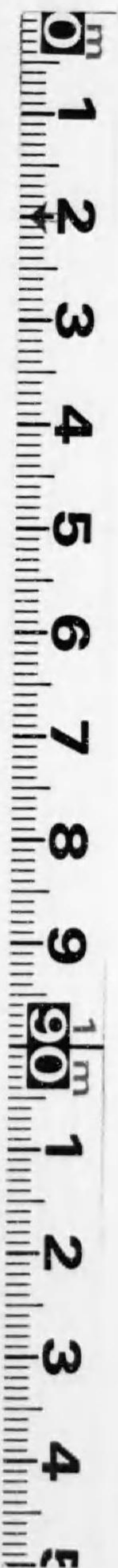


505

54



始







貧愛より正法へ  
の出家  
殉者の

大正  
11.11.4  
内交

4/11/11  
内交



貪愛より正法へ





目次

一切勝者	一
一、曼陀池	一
二、佛塔	八
三、因縁	一四
四、求道	三六
五、遇光	四四
六、橋慢と卑下	五〇
七、正法の國	五九
國境を超えて	六八
一、地獄	六八
二、懺悔	七五
三、供養	八六
四、出家	九一
五、悔恨	一〇〇
六、達磨	一一八
七、法戰	一二五

一切勝者

一、曼陀池



王禪陀迦が、長い戦の旅から歸つて來るといふ報せを齎らしたの  
 戦に勝つた國民は、自分の何物をさし出しても構はないといふ  
 戦敗者の財と勞力とは、思ふがまゝに費すことが出來たので、  
 殆ど神業ではあるまいかと怪まる程の宏壯な宮殿を、忽の間に造り上げてしま  
 つた。そこには、四季とりどりの麗しい草花や、壯緑のしげみや、爽な泉などが自  
 由に取入れられてあつた。こんもりと茂つた森の彼方に、圓柱や、丸屋根が、雲

貪愛より正法へ



の宿りさへ容易な程高らかに、すが／＼しく築き上げられると、國民は業を休んで、幾日も幾日も、新らしい憍薩羅國を祝ぎ合<sup>こほ</sup>うた。

宮殿がすつかり出来上つて、新しい主人となり濟した王の胸には、埋もれてゐた野心が、ぼつ／＼頭を擡げだした。圓柱を數限りもなく廻らした石廊に、眞如の月を眺むるには餘りにもものうかつたし、桃色や碧に輝いてゐる大理石の、めづらしい大きな石壁の間に、新奇を誇る草花や、異種の禽の歌に、心慰ることも出来なかつた彼は、石廊の窓下を歩むとき、大浴室の石段を下る時、ともすると、遠征の途上わけもなく引寄せた數々の女性を思ひ出しては、人並ないやしい野心にもがくのであつた。國民の頭には、まだ勝ほこつた歡びが失せてはゐなかつた。で、國王のかうした思ひも無理からぬことと許されるやうになつた。ほどなく、異郷から注ぎ込まれる香高い酒と、美しい乙女とは、此新しい宮殿に充されて行つた。鄙びた邑々から移し植ゑらるゝこれらくさ／＼の花も、いつしかみやこの風に

馴されてしまふのであつた。そして涼爽<sup>すずやか</sup>な熱帶樹の蔭に、思ひのまゝな豊麗な肢體を、そよ風に弄せながら眠り、つや／＼した膚を、大理石の垣にとまらせながら、遠い庭前で奏る奴隸の立琴に足拍子をとる孔雀のやうなものもあつた。さまざまな肢體が、色と香と歌と酒にとろけ込んで、人々は酔心地で月日を食<sup>は</sup>んで行つた。わけても美しい曼陀池のほとりには、夜になると、眞白い睡蓮が夢のやうに開いた。日がな一日何するともなく遊び暮す乙女達には、太陽の光は裁きに遇ふやうに怖しかつた。太陽が去つて、月が出ると、自分等の天地が生れて來たかのやうに、彼女達はさまざまな装ひを疑して、池のほとりに集るのであつた。薄銀<sup>うすしろ</sup>色の月影が水面に宿ると、我もわれもと人魚のやうなうねりを見せて水の中を泳ぎ廻つた。この柔かい光と、艶と。夜の色とは、一枚の畫布となつて、王の胸にたゞみ込まれるのであつた。初のうちは、こんな歡びがすべて國民の自分を思ふ忠義な心から惠るゝと考へてゐた王も歡樂に馴れると、これも自分が戰鬪に勝つ



た當然の獲物であると感じるやうになつた。今迄は多くの將軍や宰相など、此歡樂を俱にしようと思つてゐたが、實際に望むと人々の手前さう勝手な振りも出來兼ねたので、なるべく氣の張つた人々を遠けるやうに努めた。そしてかうした感情が遂々、禁門裡にはいかな小鳥でも、雄の啼く音さへ絶たれるやうになつた。

ところが、その頃から月を追うて、乙女達の色つやが悪くなつた。てうど、美しい果物が充分實らない先に蟲食まれて行くやうであつた。王はむら／＼と猜疑の眼を將軍や宰相の身のまはりに移して見た。けれどそこには何等の證據も擧らなかつた。そのうち乙女の一人は、恐しい謎を生んだ。王は厳しくその乙女を詰問したが、女自身にも全く解らない謎であつたので、嘘にもその原因を話すことが出來なかつた。けれども今はそんな一人の原因を探索してゐる場合ではなかつた。彼女の上に起つた出來事は、總ての乙女の顔色の悪くなつた原因を明に物語つてゐた。王は戰敗者が自分の王冠をふいに足蹴にかけたにも増して甚しい侮蔑

を感じた。それから直に、不思議の謎を抱いてゐる乙女達を嚴重に監禁するは勿論、まだ濡衣をきてゐぬ乙女達をもそれ／＼の部屋から一步も出てはならぬと命じた。乙女達は異體の知れない恐怖と、恐怖を颯ぎあてる過敏な神経とがからみ合うて、狂ひ出すものも少くなかつた。美しい曼陀池のみぎはには、いつに變らぬ清らかな睡蓮が咲いたが、時々夢遊病者のやうな王の姿が怪しい影を水面に落す外、今迄のやうな嬉々とした乙女達の聲はもう聞かれなかつた。王は不吉な謎を解く爲に、毎日々々王宮中のあらゆる男性を取調べてゐた。けれどその間にさへ次から次へと、純淨な乙女達のうちから、不純な謎が湧くのであつた。然も男性からは誰一人としてその罪人を見出すことが出來なかつた。王は最後の手段として占術師に此謎を托するより外仕方がなくなつた。

國內で最も信用のある占術師は、その秘術を行つた後おもむろに口を開いた。

「斯様な不吉な現象は畢竟するに二種の原因があります。一つは是鬼魅おにまの仕業



で、一つは是方術しのじじゆつの仕業であります」と。

それで、出来得る限りこまかい白砂を各宮門の口十間の間に敷きつめるがよい若し地上を歩むものであるならば、それが何者であるかが解るであらう。また腕の達者な者に命じて、空中を日夜不斷に隈なく切り廻らせるがよい、若し空から來るものであるならば必とその刃に斃るゝであらう。こんな手段が賢い大臣達の協議を経て、愈々實行さるゝこととなつた。門口に敷つめられた白砂の上には一匹の蟻さへ物怯えして這はなかつた。また王宮内の地上はもちろん、屋根の上にも垣の上にも立樹の上にも、恐しい白刃が間斷なく稻妻のやうに煌いてゐたので、澤山な鳥達は近くの森にさへ立寄らうとはせなかつた。かうして十日餘りが経つた。そのうち弓なりの新月が孕んで、木の實のやうなふくよかさを有つやうになつた。門衛は晝の疲れを心地よい涼風に慰められながら、うつら／＼と夢路を辿つてゐた。そのうちに姿さまざまな男が、王のかうした處置をまるで馬鹿に仕切つたや

うに、大手振つて門内へ這入つて行くのを見た。驚いて叫ぼうとした彼は自づと眼を醒した。そしてさも忠義ぶりながら白砂の上に眼を落すと、そこには瞭きりと人の足跡が印せられてあつた。然も四人程の足跡であつた。彼は無我夢中に叫んだ。王宮では直に四方の門戸を閉ざれてしまつた。そして近衛の兵達がどんどん繰込んで來た。彼等の手にした刃は、庭にも建物の中にも、あらゆる空間が寸分の隙もなく、縦横無盡に切り立てられ、王宮内は忽の間に修羅場と變つてしまつた。間もなく密房の前で一人の若者が血まみれになつて姿を現した。次に浴室の石段の上で一人、石廊の蔭で一人、都合三人の若者は穢しい屍と變つて、恚りと嘲笑の前に横へられた。兵士達はやゝ興味づいて残る一人を索し求めた。けれどその頭梁であるらしい一人は、どれだけ経つても切落されなかつた。王は血眼になつて兵士達に下知したが、出来得る限りの力を盡しても殆ど無駄骨のやうであつた。かうして不吉な忌はしい夜は消えて行つた。王も兵士達も不意の昂憤と



運動とに少からず疲れ切つてゐた。太陽が地上のすべてに正義と慈悲の光を投げると、さしも狂つた王の胸にもいつしか正しい反省が芽萌して來た。王は不本意ながら暫く兵士達の疲を慰めるやうに命じた。

不安と恐怖とに殆ど失神したやうな一人の若者が、王の周圍七尺の間は刃を用ひてはならぬといふ法律に保護されて辛じて一夜を過すことが出來た。朝がた兵士の刃が鞘に直された暇に、疲れた門衛の前を飛ぶやうに通り返けて、どこともなく消へ去つたのである。

## 二、佛塔

畢波羅樹の許に、一つの佛塔が安置されてあつた。釋尊が、涅槃の雲に隠れ給

ふと、信心深い人達は、世尊の粒骨舍利を奉戴して各所に佛塔を建てた。けれど、それは正しく世尊が、地上に始めて正覺を成就げられた時、人々の魂へ自然に響き渡るべき大法宣言の表示となるのであつた。で、人々は一日の業を始める時、正しい信念と、正しい見解と、正しい意志によつて、言葉にも身の業にも生業にも、自分の最高の努力を盡すやうに、此大法の前に合掌禮拜し、一日の業が終ると、今日一日の行爲に果して虚偽はなかつたか、放逸や怠慢はしなかつたか、人を損ひ蔑みはしなかつたかといふことを佛塔にぬかづいて深く顧みて懺悔する。かうして人々は毎日の業をいそしんで行くのであつた。そこには恐しい矛盾や煩悶や、忌しい虚偽や反逆や、食み合ひが起らないではないが、さうした闇黒の場面にも、大法護持の念力は、不可思議の力を以て、ひと／＼を光明と平安の天地に導いてゆくのであつた。だから佛塔は、そのまま光明の表示であり、佛塔の存する處は、清淨の聖域となつた。一莖の草も、蠢動する微蟲も、此聖域に這入る



ものみな、罪濁と垢穢から洗ひ浄められてゆくのであつた。

享樂と死滅、それは事件の上のみに片付けらるゝ問題ではない。それは心靈の暗闘である。懼しい忌しい夜から辛じて遁れ出た若者は、街から邑へ、まだすつかり明け離れぬ野中を、露にまろびながら、磁石に引付けらるゝ鐵片のやうに、佛塔の林へ吸ひ込まれて行つた。彼は自分の歩みをさへ意識することが出来なかつた程頭が痺れてゐた。で若しも爽な泉や、寂かな樹蔭や、忍従な嫩草がなかつたら、彼はどこまで吹き流されて行つたかも知れないのであつた。沸々と生命のやうに噴起してゐる水を見て、急に渴を覺えた彼は、野獸のやうに貪り飲んだ。さうした衝動が彼を正氣に返した。彼がやつと正氣にかへると、彼の胸には、今迄のさまざまな追憶が、大波のやうに満ち寄せて來るのであつた。

彼は橋薩羅國でも有名な梵士がくしゃの家に生れた。天稟うまれつきの才能は襤褸のうちから、他の梵士が誦する波羅門の教學四韋陀を了解せしめる程であつた。天文、地理、星

緯圖こよみ繚からあらゆる道術などみな通せないものはなかつた。その上有餘る財の光と、豊麗な凜々しい肢幹かたと、機智に富んだ所作振りとは、如何な男も女も魅し去られ、人中の人として美望の的とならずにおかなかつた。その中にも殆ど同じ程度に人々の美望を荷つて居る三人の青年が意氣相投じてわりない交りを結ぶこととなつた。彼四人の若者は波羅門の教學の上にも、深遠な詩想を鍊り上げるにも、新らしい天文や星座の研鑽にも互に才質を注ぎ合つた。けれど彼等が發表する總てが世人の眼からは、あれは別もの、彼等のなすこととして別に不思議もないといふ風に、まるで神と人との差等を彼等と世間との間に置いてゐた。爲に、彼等の制作が洵に張合のないものとなつてしまつた。そこで彼等はだん／＼強い刺戟を求め始めた。餘りに平坦な道は樂みが薄い、最も困難な道こそ最も樂の深いものだと思つた彼等は、青年の血が湧くまゝに殆ど無能とされてある一計劃を立てることになつた。それは王宮に忍び込んであらゆる宮女達を犯し廻ること



あつた。そしてその手段として先づ隱身の術を學ぶことに決した。彼等は直ちに術師の許に歩を運んで丁寧に願つた。術師は、若し隱身の術をすつかり教へてしまつたならば、若者達は再び自分を師と仰ぐことはあるまい、これは唯薬のみを與へて製作方法を知らさないで置くに限ると考へた。で、青薬二三粒宛を四人に頒けて、これを静所の水邊にて磨きその汁を眼に塗るべしと教へてやつた。處がかうした占術師が折角の考へも若者の中の一人の爲に遂に颯ぎ當てられて、九十種程の薬名が、殆ど間違のない迄に解つてしまつた。若者四人は月のいゝ晩を見計うて自由に王宮に出入した。王宮の謎は斯くして生れたのである。

けれど術師によつて生れた謎は、やはり術師によつて解きほぐされた。並び難かつた人材も、恐ろしい運命の渦に卷込まれて、三人迄悲惨な最後を遂げた。昨日まで照り輝いてゐた天上の太陽も、今日はどす黒い腐り切つた木の實のやうにみにくい地上から、直に地獄の焰へ投込まれてしまつた。初めて死に面した一人

の若者は、總ての名譽も、論理も、義理も、存在の物みなが、不確實なやましい種であることを烙印のやうに胸のどん底へ印せられたのである。そして運命のくさびが、不思議にも彼の身に絡りついて、此不確かなやましい世の中に、辛うじて生命の綱を結びつけたことは、殺された三人の穢しい死に方よりも一層慘めだと覺らしめた。彼は心が靜まるにつれて何者かにこの業因を結びつけようと焦せつた。天賦の才、名門の出、財寶の光、三人の友達、隱身の術、若き血潮、わけても天賦の才は恨めしい種であつた。けれどそれは正しい見解ではなかつた。それ等の主宰者たる自我そのものが正しき業の責任者である。もし自我の主體が天賦の才を適當に善導し得たならば、かうした破滅を招かなかつたであらう。現在の破滅は同時に過去の破滅である。習俗の環境に無抵抗に馴されて來た過去十幾年の存在には、光もなく、生命もなく、唯夢のうちに開く空華のやうなものであつたことが解つた。彼の破れた胸からは、とめどもなく熱い涙が湧いた。涙は



一滴々々種々の想を抱いてゐた。或は過去を取りもどしたいといふ女々しい卑屈な想もあつた。けれど、今迄の空虚な生活に、何等かの意義を見出すまで、突き進まねばならぬといふ強い責任の自覺が、すべての卑屈な涙を追ひ除けてしまつた。彼は男々しい胸の高鳴りを覚え、新しい世界に初一步を踏み入るゝ歡びを感じながら、嫩草の上にぬつくと立上つた。そして未見の土地の旅人のやうに邊りに緊張しきつた驚畏の眼をくばつた。その時素衣の一沙門が彼の前を横切つて寂かに歩み去つた。沙門の行く先きには、いかにも落付いた佛塔が樹々よりもるゝ斑らな日光を受けて安坐してゐた。彼は不思議な力に引づられるやうに沙門の後を追つた。

### 三、因 縁

若者「沙門よ、私の衣は餘りに穢れてゐます。私の言葉は濁つてゐます。けれど私は卑しいものではありません。私は梵士の出であります。私は今計らずも、あなたの力強い歩みを聞き取りました。私はあなたの有物もちものから何か尊いものを恵まれるやうに豫感しました。私の破れ落ちた胸の苦悶に清涼の水を恵んでは下さらないでせうか」。

沙門「友よ、私達の奉ずる教には、刹帝利(武士)、波羅門梵士(僧侶)、毘舍(農商)、首陀羅(奴隸)の差別は認めない。世尊は「どんな異つた木でも焰ゆる火には異りはない」と仰言つた。假令あなたが首陀羅の出であらうとも私は友と呼ぶことが出来る。あなたの苦悶を語らるゝがよい。沙門は法をを以て食とし、法を興へるのを歡びとする」。

若者「私は今迄どんな事柄でも、私の意欲を走せて成し遂げないことはありませんでした。多くの人が望み求めてゐる、名譽、地位、智識、健康、財寶、歡樂



それらのものは自由に私の手に落ちて来ました。私は人中の人としてあらゆる幸福を荷ひ乍ら、太陽のやうに照り輝いてゐました。私の周囲には星くづのやうに若い美しい男女が集つて来ました。ところが突然、全く突然に、運命の魔手は、私の手から、私の握つてゐた總てのものを、挽ぎ取つてしまいました。たつた今まで、山上に輝いてゐた太陽が、腐り切つた果物のやうに谷底へ一たまりもなく蹴落されてしまいました。私の周囲は眞暗になりました。今迄確かだと思つてゐたものが、すべてうつろな夢の華でありました。沙門よ、世の中はみんなこのやうなものでありませうか。私達は、からくりのやうに運命の命令のまゝに動かねばならぬのでせうか。私はほんとうに確なものが欲しい。ほんとうに確なものでありたい。これが私の願ひです。沙門よ、私に確になる道を教へて下さい」。

沙門「今あなたは、名譽や、地位や、財寶などはみんな不確なものだと悟られた。それは正しい見解であります。けれど、まだあなたはあなた自身の上に確か

さうなものを有つてゐられる。確なものを得ようとするならば、その前に不確なものをもみんな棄ててしまはねばなりません。むかし世尊はかう教へられた。「自分は今、最勝第一の「空」について語らう。我等が物を見る作用の起る時、そこに作用を起さしめる或物はない、それは唯さうした作用が起つただけである。作用はしかるべき原因と、しかるべき助縁とが結合して、一つの結果として起つたわけである」と仰言いました。また、我等の一ばん誤り易い、そして一ばん苦しんでゐる、自我といふことについて「比丘等よ、おんみらは、いろいろの工風によつて「我」を尊重してゐる。五蘊が「我」だと云ひ、或はその中の一蘊が自我だと思つてゐる。比丘等よ、かくて怠り勝ちなまた信仰のない人々は、自我とはこの肉體であると思つたり、感覺が俺だと思つたり、知覺が俺だと思つたり、意志が俺だと思つたり、認識作用が俺だと思つたりして居る。ところが肉體は結びて消ゆる水泡の様なものである。感覺は水上に浮ぶ泡沫の如きものである。知覺は太陽の



光に依つて顯はるゝ虹の様なものである。意志は纖弱い芭蕉の葉の様なものである。認識は魔術に依つて現れる幻のやうなものである。さうだのに全く内省の力の足りない人々は、五官と、心意と、性情とにより、いゝ加減な所に腰をすゑて、「これが俺だ」と思ひ、「我あり」「この我は現に存在す」「我は未來も存在す」「我は未來存在せない」と種々な論理を弄んでゐる。けれどこれらはみな、薩伽耶見（我見、個性の邪見）で、それは眞理に契はぬものである」と仰言いました。この言葉を味はるゝがいゝ。そしてこの理りを味ふに都合のいゝ昔の賢明な王と沙門の話をお聴かせませう。

\* \* \*

——信度河シンドゥーの流域に沙伽羅サガラといふ市があつた。そこは、希臘人がめづらしい商品を齎して印度と貿易をする爲に作つた市であつた。市は通りや市場が繁華であつたばかりではない、種々の物知りや高僧達が雲のやうに集つてゐた。恰度三百

年程の前である。市に彌隣陀ミリンダと云ふ賢い王様が住つてゐた。彼は犀利な理性と、落着いた判断力を有つてゐる上に、異教の哲學には餘程明るかつた。彼がその市に君臨してから澤山の哲人や高僧は、彼の宮殿に召されて、毎日のやうに種々な論議を争はせた。けれど彼の明快な論理に屈伏して、誰一人彼に上越す智者がなかつた。王は時々このやうに考へた。「閻浮提洲ニブンブダイは空虚である。閻浮提洲は萍である。私と談論して疑を晴して呉れる腕のある人がない」と。王は毎日議論の好い相手を探し索めた。

ある日、華子城から來た旅僧の一團があつた。その上座と云ふべき一人は、信度河のはとりで生れた波羅門の子であつたが、佛陀の教に歸して以來諸所に眞理の道を尋ね歩いてゐたのであつた。彼は早速王宮の所有にかゝる宏壯な園圃に召された。彼は澤山な比丘を伴つて行つたのであるが、王はまだ紹介の濟まぬ先にその人を識別し、偉大な人格に打たれてしまつた。王は慇懃な挨拶をして一面に



坐し、このやうに云つた。「大徳は世間に何と知られてゐますか、大徳の名は何と申しますか」。「大王よ、私は那伽世那ナガセーナと知られてゐます。大王よ、同門者は私を那伽世那と呼んでゐます。然し父母が那伽世那（龍軍）とか、須羅世那（日軍）とか、吠羅世那（英雄軍）とか、師波世那（獅子軍）といふ名を與へても、それらは稱呼、名稱、名目、名字、姓名たるに過ぎませぬ。茲に人は得られないのであります」。

「大徳、那伽世那よ、もし人がないものとするれば、今誰があなた方に衣、食、住居、薬料具を施すのですか、誰がそれを受用するのですか、誰が戒を護持するのですか、誰が修習行を修するのですか、誰が道果涅槃を實證するのですか、誰が殺生するのですか、誰が與へられないものを取るのですか、誰が邪淫を行するのですか、誰が虚言するのですか、誰が酒を呑むのですか。これに依つて善もなければ不善もない。善惡の業（業）の作者も被作者もない、大徳那伽世那、たとへあなたが、誰かに殺されてもそこに殺生はない、あなた方には師匠もない得戒もない。あなた

は先程「大王、同門者は私を那伽世那と呼んでゐる」と曰はれたが、然らば何が那伽世那か、大徳、髮毛が那伽世那か。「大王、さうではありません」。「身毛が那伽世那か」。「大王、さうではありません」。「爪、……歯、皮、肉、神經、骨、髓、腎臟、心臟、肝臟、腹部、脾臟、肺臟、大腸、胃、排泄器、膽汁、痰、膿、血、汗、膏、涙、漿液、唾液、粘液、關節液、小便、腦髓、これらの何れか、那伽世那でありますか」。「大王、さうではありません」。「大徳、然らば躰全體が那伽世那か」。「大王、さうではありません」。「感覺が那伽世那か」。「大王、さうではありません」。「知覺か、意志か、認識作用か」。「大王、さうではありません」。「然らば大徳、それらの外に那伽世那がありますか」。「大王、さうではありません」。

「大徳、那伽世那よ、私は斯くの如く問ひ去り問ひ來つて、遂に那伽世那を見ない。大徳、那伽世那といふは最早音に過ぎない。茲にゐられる那伽世那は誰であるか。大徳、あなたは不眞實の虚言を語られました」。



その時那伽世那は彌隣陀王にこのやうに曰つた。「大王、あなたは、王者に相應しい極めて優雅な環境のうちに人となられた。すればきつと注意深い大臣の爲に今日の行幸には華かな車が用ひられたこととせう。大王よ、正しくさうでありましたか。」「大徳よ、私は車で参りました。」「大王、もしあなたが車で來られたなら、私にその車を知して下さい。大王、心棒が車でありますか。」「さうではありません。」「軸が車でありますか。」「さうではありません。」「輪が車でありますか。」「さうではありません。」「支柱が車でありますか。」「さうではありません。」「輻が車でありますか。」「さうではありません。」「留釘が車でありますか。」「さうではありません。」「大王よ、そんなら、心棒、軸、輪、車體、支柱、輓、輻、留釘の外に車があるのですか。」「大徳、さうではありません。」「大王よ、私は尋ねてその車を見ることが出来ません。大王よ、車は只の音にしか過ぎない。あなたの乗つて來られたといふ車はどれでありますか。大王あなたは非眞虚言を話され

ました。大王あなたは全閻浮提洲の第一の王である、誰を恐れて虚妄を語られるのであるか。集れる澤山な人々よ。この彌隣陀王は、このやうに曰はれた。私は車に乗つて來た」と。そして「大王、もしあなたが車で來られたなら、その車を私に知して下さい」と問はれて、自分の車を得ることが出来なかつた。重ねて、尊者那伽世那は聲を高めて云つた。「我の場合に於ても亦左様であります。世尊も亦「馬車の諸部分が相集つて一の馬車を作るやうに、五蘊が集つて一の我を作る」と宣ひました」。

その時太陽は既に没しかけてゐた。彌隣陀王は、初めての大徳を得て歡びながら、侍臣を召して云ふやう、「それでは大徳につけてお呉れ、明日は宮殿に於てお待ち申します」と。論議の第一日はかくして終りをつげた。

友よ、おんみは、この問答によつて、「我」の個定された存在はないことが解つ



たでせう」。

若者「解りました。けれども私は考へます。五蘊が假りに結合して「我」を生ずるとしますと、その結合せしむる力は何處にあるのですが、五蘊のうちにあるのですか、または五蘊のほかにあるのですか」。

沙門「結合する力はある。それは「業」と呼ばれてゐる。しかし、「業」は五蘊のほかにはありませぬ。木と木とが撞れ合つて、火を發したとする。木と木の單なる寄集りでは火は發らない。また、木をどれだけ劈いて見ても火は存在せない。たゞここに都合のよい原因と助縁が結合して始めて火が發るのである。だから火は木からは出ないが、亦木から離れてはをらぬのです。

おんみは梵士だと云はれた。すれば定めて四吠陁ウエダに通じてゐらるゝだらう。だから恐くは「我主」があると考へらるゝかもしれない。けれど考へらるゝがいと。たとへば、眼と外界との接觸によつて眼識が起る、眼識が起る所に、快不快苦樂

の感が起り、取捨分別の意念となる。意念があれば、更に識を起し、識は意念を生ずる、この兩者の間に往復の關係があるばかりで、別に「我主」といふ個體はないのであります」。

若者「結合する力は「業」であることは解りました。しかし「業」の力はたゞ心識と心識の對象を結合するだけでありませうか、また時間の上に前後の必然的な關係を有つものでありますか」。

沙門「いゝ所へ氣付かれました。「業」は空間の總てを結合する力であると同時に、時間上の總ての事件を統一する力であります。これが解り易い爲に先程の王と沙門の或日の問答を話させう」。

\*

\*

\*

\*

\*

——王は曰つた。「大徳、那伽世那、生れた者は同一に存しますか、又異なる者となりますか」。上座は曰つた。「同一でもなく又異でもありません」。比喻を設



けて下さい。「大王、あなたはどうか考へますか。繊弱い、稚さい、這うて居る赤子のあなたと、今のあなたと同一でありますか。「大徳、這つてゐた赤子の私と生長した今の私とは異なります。「もしさうとすれば、今あなたには母といふものもなく、父といふ者もなく、教へるものもなく、持戒の者もなく、有智の者もないといふことになります。大王、入胎位の母と、赤子の母と、成長した者の母と皆別でありますか。學びつゝあるものと、學び終つたものと別でありますか。悪業をなしたものと、手足切斷の刑罰を受けるものとは別でありますか。「大徳、さうではありません。大徳は一體何を曰はうとせられるのですか。那伽世那は曰つた。「大王よ、私は、弱々しい、稚さい、這廻つてゐる赤子であつたが、今生長してゐる、これが同一であると曰はうとするのであります。これは「業」によつてすべて一つに結び付いてゐます。「比喻を設けて下さい。「大王よ、喩へば人あつて燈をとぼします。それは終夜燃えてゐるではありませんか。「大徳、終夜燃え

てゐます。「大王、初夜の炎は、中夜の炎と同一ではありませんか。「大徳、同一ではありません。「大王、中夜の炎と、後夜の炎と同一ではありませんか。「大徳、同一ではありません。「大王、初夜の燈、中夜の燈、後夜の燈はみな別々のものではありませんか。「大徳、さうではありません。その燈に依つて終夜燃えてゐるのであります。「大王よ、かくの如く法の相續はやむことはありません。或者は生れ或者は滅する、さうして同時に繼續してゐます。だから人は後の識集(自己の識してゐる全體、即ち現在の身體、後の識集とは後念の身體)に同一でも異でもありません。「更に比喻を設けて下さい。「大王よ、喩へば、牛乳をしぼつて時が経ちますと凝乳が出来ます。凝乳から、酪が出来ます、酪から牛酪油が生じます。大王よ、もし牛乳も、凝乳も、酪も、牛酪油も、同一であるといつたら正しいではありませんか。「大徳、正しくありません。然し、それに依つて生じたものであります。「大王よ、斯の如く、法の相續は繼續してゐます。或者は生じある者は滅する。さうして同時に繼續して



ゐるのです。それで人は後の識集に同一でも又異でもありません。「大徳、那伽世那、巧みに曰はれました」。

「友よ、この話によつて法の必然的相續が解つたでせう」。

若者「沙門よ、解りました。しかし私の愚問を少し御許し下さい。私は幼い時に波羅門の教學を學びました。そのうちにかやうに教へられたのです。「人は各其行爲に應じて、或は痴、或は啞、盲、聾、或は畸形に生る、自己の罪を償はざりし者は、生れて治すべからざるの表號を有せり」。或はまた「精神を知り、清淨柔和にして正行を修し、吠陀に通ずる人は喜の徳を有する人にして天に生る。善をなすを喜ばず、心堅固ならず肉慾に耽る人は憂の徳を有する人にして、人と生る。睡眠を貪り、殘忍の行をなし、貪婪にして神を信せざる等の人は、闇の徳を有する人にして、畜類に生る」と。又或ひは「果を盗みたる者は猿となり、馬を

盗みし者は虎となり、米を盗みし者は鼠に生れ、首陀羅の女と通ずる者は餓鬼となる」。また「師の寢床を犯した者は草となり、死に當る罪を犯した者は永劫の間奈落に落つ」と聞きました。けれど昔の人が云ひました。「天もない、解脱もない、精神もない、他界もない、行爲の應報もないのだ。澤山な儀式は智慧の足りない道樂者が生計の手段につくつたものだ。若し犠牲を供して、その供物が天上に上るのなら、人は歡んで自分の父を犠牲に供するだらうし、地上の供物が天上に達するのなら、屋下の食物が屋上の人を養ふだらうし、死んでしまつた祖先に供物が運ばれるなら、旅人に糧食を持つて出かける馬鹿者もない。いのちのあらん限り、歡樂を盡すが徳だ、お金がなかつたら友から借りても美食に飽け」と。この二つの道にどちらに眞理があるか私は知らない。けれど現にこの橋薩羅國では、さまざまの人の境遇が混つてゐます。またさまざまの人の相貌、性質、能力が違つてゐます。譬へば、生れながらにして富めるもの、生れながらにして貧しいも



の、或は智慧あるもの、愚なるもの、権力者、奴隷、男、女、美、醜、強、弱、それらの差別は誰が作ったのですか。私は已前から教へられました。此世界は梵天の意志によつて、それから分出して成立した。波羅門は梵天の口から生れ、刹帝利はその腕から生れ、毘舍はその腰から生れ、首陀はその足から生れたのだと。これは正しい見解でありますか。

沙門「それは正しい見解ではない。「業」の外に梵天はないからである。あなたは今、生れながらにして、と云はれた。しかし「業」は我々の意識の先に存在してゐる。「業」は現在の「我」を統一するのみならず、過去の「我」をも統一し、未來の「我」をも統一する。それは丁度、乳房にすがつてゐる小兒が、右の乳から左の乳へ、口移しするやうなものである。右の乳は我々の意識のとどかない前生の識集後の乳は今生の識集である。そして小兒は「業」である。今少しこの理を解り易くする爲に前の問答の續きをお話しませう」。

彌隣陀王は那伽世那に問うて曰うた。「大徳、人の死後、誰か後世に生るゝのですか。「名(精神作用)と色(物質)とが後世に生れます」。「では故人の名色が行つて生れるのですか」。「さうではありません。現在この名色が善惡の「業」を造ります、この「業」が後世の名色を造るのであります」。「大徳、現在の名色が「業」を作つたとしても、その「業」はすぐ次の一念に消えてしまふではありませんか、それにどうして來世まで保つことが出来るのです」。「大王、それはかういふ譯であります。譬へば人が他人の果菰を盗んだとしませう。すると主人が此盗人を捕へて、將ゐて王の前に來り、「この人は我が果物を盗みました」と申します。ところがこの盗人は「私はこの人の果物を盗みませぬ、この人はたゞ果物の苗を植ゑたばかりです、果物を植ゑたのではありませんでした。私は果物を取つたのです。だから私はこの人の所有を取つたのではありません、私に罪はありません」と申



しましたら、大王はどちらが正しいとなさいますか。また譬へば、酒樓の主人が錢で貧乏人の少女を買つたとします。少女はだん／＼成長して容貌美しい娘となりました。或男がこの娘と戀に陥りました。そして二人は新しい家庭を作る爲に家出をしました。樓主は追つて娘を捕へ、王の前に訴へ出ました。ところが戀した男は叫びました。「私はおんみの娘を盗んだのではない。おんみは少さい少女を買つただけだ。私は成長した娘を獲ただけだ」と。大王、この場合どちらが正しいとなさいますか。「大徳、私は盜を罰します、さうして戀した男を罪します」。「大王、その通りであります。「業」には相はありませぬ。けれどもかくなるべき必然の因を含んでゐます」。

友よ、これを味ふがよい。「業」には相はない。けれども、かくなるべき必然の因を有つてゐる。だから人は生れながらに、さまざまの境遇を有つてゐる。これは

\* \* \* \* \*

皆、過去の「業」の所産である」。

若者「私は、いまさまざまのことが解りかけました。ではもう少し問はして頂きます。今のお話のなかに、「名色が業を作る」と仰言いました。それはどういふ譯でありますか」。

沙門「名とは細微な質であらゆる精神作用を總括して云つたもの、色とは粗大な質で物質、こゝでは肉體を云つたものである。この二つは卵の中身とその殻のやうに決して離れないし、どちらが先に出来たとも云へない。この精神作用と物質作用とが常に業を作るのである。業は現在または未來のさまざまの稟性や、性格や、境遇を必然に招く。これらの稟性や、性格や、境遇がまた新らしく精神と肉體の作用に現れて業となる。かくして圓周を廻るやうに、悠久な時間の上を輾轉して行くのである。も少し詳しくお話しませう。

友よ、あの泉のほとりに美しい水仙が開いてゐる。梢もる光を浴びてすつきりと



開いた様は圓かに照る満月のやうだ。あのふくよかに匂ふ高い香りが澤山な羽蟲の心を誘うて行く。甘い蜜は羽蟲を心ゆくばかり享樂せしめる。蟲はよろこびの餘り幾度も／＼花の上でとんぼ返りをしてゐる。香に酔うて眠つてゐるものもある。けれどあの花のいのちは夕風が訪れるまでだ。羽蟲はそれを知らない。花は蟲がとんぼ返りをしてゐるやうが、眠つてゐるやうがおかまひなしに凋んでしまふ。夕風が立つと蟲は俄に物哀しさうに鳴きながら飛んで行く。眠つてゐるものはそのまま花に包れて死んでしまふ。またあの水仙には莖の髓に喰込で行く毒蟲がある。まつ盛りに咲いた花が急に凋み、莖と共に水面に落るのを見るであらう。毒蟲は髓をしがみながら水の中へ落るのである。友よ、これが人生だ。歡樂の裏には、愁、悲、憂、惱、病、老の苦しみが絡りついてゐる。そして死の毒蟲が歡樂のさなかに人の魂をそつと奪つてしまふ。人はそれを運命だとかたづける。けれどもそれは思索が足りない。今、我々の眼前にあつて最も強く我々をおびやかすもの

はこの老いや病ひや死滅である。しかしこの老病死のあるのは、云ふまでもなく生れて來たからである。また生きてゐるからである。生れて來るあるひは生きてゐるのは、生くべき要素をとらへて離さないからである。とらへて離さないのはものを欲愛するからである。ものを欲愛するのは、知覺と、感覺と、意識統一の主觀と、對境の客觀が存在するからである。それらの存在や欲愛は、生きたいと思ふ盲目的の意欲が根本となつてゐるのである。この盲目的意欲の斷滅は、現實のさまざまの不純な欲愛の斷滅であり、妄見妄執の破盡である。そは唯我等の實際經驗の上に體驗さるべきものである。友よ、おんみは今正しい見解の窓が開かれた筈だ。これから體驗の道に上らねばならない。破執の刀を振ふがよい、ではおいでなさい」。

若者「私は思ひがけなく深い理ことわりを承りました。私の心は大ぶん穩かになつて來ました。お別れします」。



沙門「今日はこれでお別れしませう。けれど私にも一度おんみに會ふやうな氣がする。おんみの幸ある修道の上で、私はきつとおん身に會ふ。さらば、友よ、心して行くがいく」。

#### 四、求 道

そのむかし、偉大なる神ヒマラヤは、神として最も勝れたるシバを産み、柔い白雲のなかで育て上げた。シバは明月よりも澄みきつた面容と、宇宙を吞吐する廣やかな胸と、生きとし生けるものを愛しみ育くむ美しい掌と、悪魔をとり拉ぐ獅子王の如き脚を有つた、偉丈夫であつた。

そのころ地上には一滴の水も恵まれてはゐなかつた。ひとくはどうかして水が欲しいと思つてゐた。そのうちに賢い老人の發議で、ヒマラヤのシバ神に祈願

することになつた。シバは平生から人々を愛してゐた。でかうした願ひも自分の手で契へてやり度いと思つた。けれどどこから水を運んだらいくかと心配した。彼は清夜空を横切る天の銀沙を思ひ出した。あの天の川の水を地上に下したらと思つた。早速彼は梵天に願つた。梵天はシバの俠氣をめで、その願を容れてやつた。そこでシバは天の川を抱えながらヒマラヤの嶺まで下りて來た。しかし注意深い彼は、一時にそれを地上に置くことの危険を知つた。だから三年の間ヒマラヤの嶺でそれを抱え、その後地上に置いた。人々は洪水の難もなしに、恵まれた洋々たる大河を目前に見て、歡喜し、慈悲深いシバ神を譽め稱へた。そしてその河を**残河**と呼んだ。残河は永へに人々のいのちとよろこびを恵んで流れるのであつた。

かくしてシバの名は五天竺に響いた。その男々しい性格と、象王のやうな肢幹とは、若い乙女の血を燃やさしめた。なかにも森の乙女ウーマーは、美しい忍柔



の瞳を、快活なシバの踵に落して、いひ知れぬ情ひに悩んでゐた。カーマは物好きな少年であつた。それは神でも人間でもかまはない、若しか若い男と女が互に想ひやり、或は片方だけが想つてゐると可愛さうで見えてゐられぬ性分であつた。そのみか格好な男女がゐて、雙方とも想つてゐない場合でも、彼の物好きな性格は彼等になんとか事件を起させねば置けぬのであつた。彼は早くも森の娘の戀を知つた。どうかしてそれを遂げさせてやり度いと思つた。彼は自分の身も忘れてシバの許へ驅けて行つた。

シバは大きな望を澤山に有つてゐた。だから一人の愛の爲に澤山な愛を失ふことを欲しなかつた。森の乙女の戀も感ぜないではなかつたが、彼の大きな望みがつい時期を遅らしてゐたのであつた。カーマはそこ迄シバの心を知らなかつた。彼は手頃な白羽の矢をつがひながらシバの胸元深く射込んだ。シバは突然の出来事に少からず腹を立てた。そしてカーマを噉まえると、可愛やカーマは死んでし

まつた。けれど射られた矢のためにシバは遂々森の乙女を娶つた。それからヒマラヤには、和氣靄々たる雲が棚引くやうになつた。

ヒマラヤはかくして、人々のいのちと、平和と、幸福を掌つてゐた。時は矢のやうに流れる。その間、物は變り、人は移り、有爲轉變の世相はだん／＼深刻さを増してゆく。人々は憂喜苦樂の情を、父に話するかのやうに一々ヒマラヤに訴へてゐた。で若しか世に神秘的な出来事が起つたり、不可解な謎が生れると、ヒマラヤの樹々か、嶺の清らかな泉のほとりにでも、謎を解く鑰が藏はれてゐるものやうに思つてゐるのであつた。けれどそれは雲を掴むやうな空想ではなくて、尊い自然のうちに輝いてゐる神の光を望む至誠であつた。そして誰云ふともなく人の口から口へ、こんな音信が傳はつて來た。ヒマラヤにはいつから出來たともしれない——あるひは七百年程前に、北天竺に生れた尊い若い王子が建てたのだとも里の翁は語つてゐるが——大寶藏が人待ちげに立つてゐる。そこには尊い力が



藏はれてあつて、どんな不可解な謎も、神秘的な疑も、あの頂から流れ落ちる水が、いつの間にか水に變つてゐるやうに、解きほぐされずにはおかないのである。そしてこの寶藏は、閻浮提の山川が水に溺れようとも、劫火こくわに焼き落されようともあらしにゆるがぬ北斗星のやうに、一ゆるぎもしないで堅固である爲に、龍神によつて護られてゐると。

若い巡禮が、この寶藏への上り口までやつて来るのは度々であつた。彼等の眼には一ぱいに望みの光が漾うてゐた。彼等の胸は自信と誇りに波立つてゐた。彼等の足は獅子王のやうに強く、一生の運命を乗せてゐた。けれどどうしたことが一度登つた巡禮の姿は再び下りては來なかつた。それは張りきつた弓が、時のたつとくもに、だん／＼緩んで行くやうに、脚の力が萎え、眼には嫌忌の惡魔の影が宿る頃、突風や、山霧の爲めに命を落してしまふのであつた。若い巡禮の無慘な屍を見つけると山の翁は、この哀れな若者を美しい小鳥に變へてやつた。小鳥は

朝日がさすと、山の中腹の一ばん日當りのいゝ所でいつも夢心地で歌うた。——樹々はこみどり、華は曼陀羅まんだら、つゞく野原に、春の太陽は照る、——行こか殘河ざんが飛ばか信度河しんたが、野にも水にも、えざしはこぼるゝ、——かうして、胸で爽かな風をかき分け、羽一ぱいに香風を孕みながら、山から谷へ、谷から原へ、飛び下るのであつた。野には香むせぶばかりな花や、蜜のやうな木の實が、房々と垂れ下つてゐて、小鳥の眼と腹と魂のどんぞこ迄も充してしまふ。小鳥は太陽が西の原に没するのも知らずに心ゆくまで歌ふのであつた。太陽が没すると、五天竺の風は一時にヒマラヤの懷に歸る。小鳥は驚いて飛び立つ、突風は容赦なく小鳥を梢に追ひ返す、風はだん／＼冷えて行く。小鳥は澤山な仲間と互ひに羽がひしめながら震つてゐるが、木膚が氷のやうに胸毛をさすので、始めて自分達には巢がないことを知る。夜は暗い、風は益々加はつて來る、木の枝が挽ぎ取られると、小鳥は木の葉のやうに暗に散つてゆくのであつた。小鳥は涙ながらに歌ふ——氷の



しとねに、ひなは眠れず、山のあらしに、はがひはさける——巢を造らう、巢を造らう、夜があけて、朝日がさしたら——小鳥達は夜中かうやつて鳴き明すのであるが、あしたになると、あらしは夢のやうに消え、春の海のやうな平和が歸つて来る。小鳥の胸には楽しい野の香りが薫りだすと、歌が自然に喉元から走り出る。小鳥はすつかり夜中のことや巢のことを忘れて、我勝ちに飛び立つてしまふのであつた。

今日も小鳥の聲が楽しさうに聞えてゐた。朝日が山の嶺から谷底へ一ばん最初の光を投げた時、若い巡禮が一人、寶藏へ道を辿つてゐた。彼の足並は今迄の巡禮のやうに性急ではなかつた。彼の踵はびつたりと大地について、一步一步が、大地から生え出た畢波羅樹びばらのやうな確かさを有つてゐた。また彼の眼は、今迄の巡禮のやうに、遠い寶藏にのみ集注されてはゐなかつた。上り行く道が寶藏そのものであるかの如く、歩々に瞳の輝きを増していつた。かうした違ひ目は、今迄

の巡禮のやうに、突風にさらはれる心配からも、山霧に迷はさるゝ危険からも除かれてゐた。彼は夜も晝も休みなく進んだ。その努力が酬こたわられて、殆ど七百年の間人の訪れない寶藏の前に辿りつくことが出来た。

彼が寶藏に達すると、大地は震ひ、空からは天の曼陀羅華が雨のやうに下り、澤山な龍神は、香高い華皿を捧げ、微妙な音楽を奏でゝ迎へて呉れた。そして彼の意外としたことは、これらの龍神に混つて、曾て教を受けた沙門が、そのまゝの姿で彼を迎へて呉れたことであつた。沙門は無言で彼を手まねいた。彼はなつかしさと崇さに一ぱいの涙をうるませながら沙門の後に續いて行つた。沙門は恭しく寶藏の扉を開いた。寶藏の内はたゞ光の海のやうであつた。沙門も龍神も自分さへも何處にゐるか判らない程であつた。彼は此不思議な光の中で、無上の法悦と、新しい疑念に充されてしまつたのである。



## 五、 遇 光

若者「沙門よ、この輝は何でありますか」。

沙門「友よ、これは一切勝者の光である」。

若者「おう、一切勝者、それは私の最初の願だった。そして是れは最後の願だ。

沙門よ、どうか私に一切勝者を見せて下さい」。

沙門「友よ、早まつてはならない。あなたが、一切勝者に會はれる前に、私はあなたに尋ねたいことがある。友よ、おんみは一切勝者を見ると云つた。それは過去に於てか、未來に於てか、現在に於てか」。

若者「過去に於てともありません。過去の生は已に滅してゐるからであります。また未來に於てともありません。未來の生は未だ來ないからであります。また現在に於てともありません。現在の生は暫くも止まらないからであります」。

沙門「友よ、おんみは一切勝者に會ふといふ。然らばおんみと一切勝者とは何か異か」。

若者「沙門よ、私は曾て自我のないことを悟つた。自我はない。従つて彼もない。だから異るとも云へない。然し現に一切勝者の光を見てゐる。この事實はどうすることも出來ない。光がある。そして私がある。だから一であるとも云へませぬ」。

沙門「若し光と、あなたが、異なるものなら、あなたはどうしても光に會ふことが出來ないであらう。また、一であるならば、あなたは光に會ふことは出來ないでせう。では、友よ、光は常に在るものか、或はないものか」。

若者「光は暫くも止まつてゐない。それは念々に生滅してゐます。だから常在のものではありません。また、光は生滅の間にも光つてゐる。だから斷滅ではありませぬ」。



沙門「友よ、光の生滅には、原因と助縁とその結果があらう。前の光が原因で後の光が結果だと云へようか」。

若者「先の光の存在する時に、後の光はありません。後の光の在る時に、前の光はありません。先の光から云へば、有なる原因が、無なる結果を引起すことは出来ない。また後の光から云へば有なる結果が無なる原因から起ることは出来ません。だから光は來るのでもない、また去るものでもありません」。

沙門「友よ、あなたは、光について、不生不滅、不一不異、不斷不常、不去不來を悟りました。今では、光が何であるか、一切勝者がどこにゐるか、充分體得されたであります」。

若者「解りました」。

沙門「ではあなたは、その光を失はずに道を歩まるゝがよい。あなたの光は、同時に一切衆生の光であります。あなたが光に生きることが同時に一切衆生に光

を與へることだとも解つたでせう。そして一切衆生の光がすべてあなたの眼にうつるまで、あなたは、その光を捨てることは出来ません。

智度を母とし

方便を父とし

菩薩、

これより生る。

友よ、おんみは煩惱の賊を滅す爲に勇健に戦はねばなりません。煩惱魔、五陰魔(生活の苦闘)、天魔、死魔と戦つて勝旛を道場に建てねばならぬ。諸法は不生不滅だと知つても、衆生に示す爲には種々の善巧方便を忘れてはならぬ。諸佛の國も、衆生も、すべて「空」だと知るが故に、衆生を實際の道に入らしめ、佛國土を建設し、それを莊嚴せなければならぬ。あらゆる衆生の性格と境遇とを、熟慮し察知して、それに應じて彼等を育み成就へてゆくがよい。時に疾疫があれば藥



草となつて病の種を除き、饑饉が起れば、食物となつて饑渴を救ひ、戦あれば大悲の劍を抜きて争の根を断ち、一切國土の中の諸有る地獄に趣いては人々の苦惱を濟ひ、憍ぶる者はこれを抑へ、恐るゝものには無畏心を施し、色を好むものには婬女となりても彼を牽いて無上道に入らしめねばならぬ。

友よ、下界を見なさい、あの雲の海を見なさい。そしてあの雲の海に浮き沈みしてゐる澤山の鳥を見るがよい。あれは、曾ては私等の相であつた。私達の修道はずるぶん永かつた。私達のさかしらな智慧は時とする雲の上まで飛び上らした。けれどすぐに恩愛の情が雲の中へ私を落し込んでしまつた。いろ／＼の教へは此浮沈を止める爲の手段として設けられたのだが、教へそれ自身が常に雲に浮いてゐる、甚だあやふやなものであつた。私達は初めて太陽のあることを知つた。そして太陽をあこがれた。けれど太陽と自分との間を、餘りに遠く隔たしめてゐた爲に、太陽をあこがれながら、太陽に近寄らうとしなかつた。然し太陽は

我々を見捨てはしなかつた。我々は太陽の發する不可思議な力によつて光の中にとろけこんだ。私達は太陽と一つになつた。私達の全身が光であつた。光は晃々と雲霧を照してゐる。光は衆鳥の浮沈をじつと見つめてゐることが出来ない。雲霧を晴らしてやらなければならぬ。雲霧を除いて一々の鳥の羽に金色の光を與へねばならない。それは光の唯一の使命であつた。

同胞はうつろなる雲

己が意の所轉に隨ふ

道品は善き師ぞ

菩薩、これによりて正覺る。

友よ、今は山を下る時が來た。山を下つて衆生にまみえるがよい。一切衆生の菩提の相をしつかりと觀るがよい。

若者「沙門よ、私は今思がけなくも光を體得しました。一切衆生の善き親友と

貪愛より正法へ



なる爲に山を下ります。謙恭に聞き得ましたみ法を、一切衆生とともに實行したいと思ひます。

## 六、 憍慢と卑下

若者は山から下りて街の入口まで来た。そこは沙羅の林が涼しい木蔭を恵んでゐて、澤山な人々は物憂い晝を涼風に慰められながら、眠つたり話し合つたりしてゐた。若者はそれ等の人々がいかにもなつかしく思はれた。一人々々に話しかけても見たいやうな氣がした。その時てうど、一人の婆羅門が澤山な弟子を連れて、人々の手厚い敬禮を受けながら林の中程に立止まつた。彼の周圍には、忽ち澤山な男女の人垣を造つた。波羅門は人々に「供<sup>いけにえをさぐる</sup> 犠<sup>ぎ</sup>は最上の善である、それは梵天に使ふる最上の道である、それは祖先に對する最上の孝養である、しかのみ

ならず、それは自分にとつて最大の幸福である」と説いた。若者の胸には直ちに、その言葉のうちには、どんな眞理も含まれてゐないことが浮んだ。そして人々がかういふ教によつて自分自身を害<sup>そこな</sup>ふばかりでなく、梵天も祖先も傷けることを哀れと感じた。だから彼は寂かに云つた。

「波羅門よ、人々をほんとうに愛<sup>いづく</sup>むならば、そのやうな不眞實の言葉を與へてはならない、供犠が最勝の善であるとは誰が教へるのか」。

「若者よ、これが眞實でなくて他に何の眞實があるか、供犠が最勝の善とは經典によつて教へられてゐる」。

「波羅門よ、私も一時はその教を認めてゐたものだ。けれどもそれは單なる空言である。それは自我の福利を目的とする。どこまでも醜い我慾が付纏うて離れない。供犠とは我慾の變形である。供犠を捧ぐる歌頌<sup>うた</sup>は天を垢し、祖先を害ひ、自滅を急ぐ呪の聲である。波羅門よ、私は今供犠に更ふるに、布施行を保つてゐる



る。布施とは、我執、我慾を捨て、一切の所有を衆に施すことである。私はそれによつて新しき生命が念々に湧き出して来るのを歡ぶ。私はこれによつて、私自身が生き、従つて祖先が生き、梵天が生きることを知つてゐる」。

「若者よ、おんみは私を陥れようとするのか」。

「波羅門よ、決して左様ではない、私はおんみを育まうとするのだ」。

「若者よ、それは無駄だ、私には神通が具はつてゐる。私の神通は、おんみの僞慢の鼻をさう永くは保せないから」。

「波羅門よ、試みるがよい」。

人々はこの問答に驚き且つ興味づいて、一層澤山集つて來た。波羅門は満面に得意の色を漾せながら、嚴かに神呪を稱へた。すると忽の間に、地面が割れて自然の泉が湧き出して來た。その中から八葉の蓮華が大傘のやうに生え出た。人々は未曾有の奇蹟に競うて歡呼の聲を擧げた。波羅門は悠然と一躍蓮華の上に坐して曰つた。

て曰つた。

「汝、地上の虫けらよ。この清淨有戒のものゝ姿を見よや」と。

その時、若者の姿は消えて、八牙の白象が崇重な歩みを泉のほとりに移し、なめらかな鼻で蓮華の莖をたをりかけた。波羅門は戦き恐れて叫んだ。人々の驚きは頂點に達してゐた。波羅門は面目なさにすぐ姿を陰してしまつた。白象の姿も消えた。人々の驚きのなかに、唯一人若い沙門の姿のみが神々しく輝いてゐた。

街は梵天を祠る祭日で花園のやうに飾られてあつた。祭壇の周圍には、武士も學者も商人も各々一團となつてソーマの神酒に酔ひしれてゐた。奴隸に屬する陶工の一人が、祭りの模様が眺めたさに、そつと人垣の間にまぎれ込んだ。そこはてうど、大樹の蔭でさまざまな人が集つてゐたが、祭の儀式に熱中してゐる人々は、大して咎め立てはしなかつた。陶工は總てを許された心持ちで、時の移るの



も忘れて観てみた。儀式が済むと人々の眼は自分達の周圍に歸つて來た。そしてそこに奴隸の陶工がゐるのを見付けた一僧侶は大聲で叫んだ。「ここに奴隸がゐる神聖な儀式は潰されてしまつた」と。聲に驚いた人々は一時にこゝへ集つて來た。ひとくは異口同音にこの陶工は私刑に處するがいとひしめき合つた。一人の若い沙門は、その發起人である一僧侶に尋ねた。

「首陀羅が混つてゐることがなせ神を潰すのですか」。

「それは定められた掟を破るからである」。

「掟は誰が定めましたか」。

「それは神によりて定められた」。

「それは神の爲に定められたのですか、また人の爲に定められたのですか」。

「それは人の爲である」。

「若し人の爲だと云ふなら、なせ此陶工の爲にも幸福であるやうに定められて

ゐないのですか」。

「陶工はもと奴隸の出であるから」。

「人々よ、それは神によつて定められた掟ではあるまい。それは專横な一種族の身勝手な律法であらう。人々よ、陶工は人間なるが故に、神の前に立つて何の支障もない筈だ。陶工は正當に許されねばならぬ」。

集つて來た人々も、真理の前には敵することが出来なかつた。一人去り二人去りすごとくと散ばつてしまつた。その時陶工の眼には、一ぱいに熱い涙が湧いてゐた。恐るゝ若い沙門の踵に口吻けして曰つた。

「許して下さい、私は恐しい罪を犯しました。私は人々の前で鞭打れねばなりません。私は御見かけ通り奴隸であります」。

「友よ、氣を落つけて聞くがよい。むかし世尊は、貧しき友スニタを教團の一人として御加へになつた。スニタは年を取つてから多くの友に、自分の入門の動



機を話した。——「私はもと賤民の子として生れ、貧しくその日を送つてゐました。世の中のひとぐは一人として私を賤まないものはありませんでした。私も賤民として自らを卑うし、いつも世の中のひとびとに尊敬を忘れませんでした。偶々、世尊は澤山な聖者達をお伴れなすつて、摩揭陀の都へ御いでになるのを知りました。私は世尊を唯一目でも拜みたいと思つて仕事を捨て、行道し給ふ道へ走つて參つたのです。すると、世尊は、私の走り寄るのを御覽になりまして、こと更み足をお停め下さいました。私は脚下みあしのもとにひれ伏して、どうぞお弟子の一人にお加へ下さるやうにと御願ひしました。それは私自身にも思ひがけない言葉であつたのです。ところが、慈悲溢るゝばかりの世尊は、私にお告げになりました。「友よ、來れ」と。この御言葉にひかれて私は佛弟子となりました。——この追懐の言葉を味ふがよい。さうして世尊の御慈悲の廣大なことを味ひなさい。友よ、おんみはひとぐの前で鞭うたれねばならぬといふ。私はおんみのさう

した謙讓のころをうらやましく思ふ。けれどあのひとぐに鞭打たれることは大きな罪である。鞭打つた人に罪を犯させるばかりでなく、それはおんみとしても罪を犯すことになるのだ。おんみの謙讓な心はあの人々には解るまいが、既に世尊の御慈悲の前には、あの人々の憐つた衣の色よりも美しく輝いてゐる。友よおんみのなやみはいつ迄も人の裁きを受けることにはあるまい、おんみの眞實の道を辿ることの上にあるのではないか。我等が道に入る動機はたゞ一度しかないのだ。考ふべきときは今だ。今を措いて友よ、おんみの行く道は永へに開かれはしないのだ。

「沙門さま、私の進むべき道とは」。

「唯一つ法の道をしへがあるばかりである」。

「私は毎日の生活に殆ど全力が盡きてゐます、それ已上に法の道を行ふことは私には出来ないことです」。



「友よ、み法には無量の門がある。自がじしの根機によつてどこから入つてもよい。法の道には難きもある易きもある。てうど、陸道の歩行は弱者や女には、六ヶ敷いが、水道の乗船はどんな弱い者でも可能であるやうなものだ。菩薩の道もまたこのやうである。出家して勤行精進する道もある、或は現在のまゝ信方便の易行で歡喜地を得るものもある」。

「信方便と申しますと」。

「阿彌陀佛の本願を證することです。彼阿彌陀佛は、「若し人、我を念じ、名を稱して自ら歸すれば、即ち必定に入り、阿耨多羅三藐三菩提を得ん」と誓はれてあります。故に阿彌陀佛を憶念する人は彼佛の威神力を體得するのであります。業につながれて、毎日の生活に追はれてゐても、阿彌陀佛を憶念まつことは出来ませう。憶念れば十方の諸佛に護念られ、何者にも畏るべきことはなくなるのです」。

「沙門さま、ありがたうございました。私は尊い御慈悲を初めて聞かして頂きました」。

陶工は涙ながらに最敬の禮をして沙門の許を去つた。

## 七、正法の國

過る戦勝を記念する爲に、城東門外の廣庭で閱兵の式が行はるゝのであつた。廣庭の周圍には芭蕉を植ゑ、木と木の間を紅白の花蔓で結び、處々に美しい水瓶が置かれてある。その中へ歩、騎、長鎗、象軍、旗、戰車、音樂などの部隊が肅肅と入り込んで来る。南の正面には高らかに張られた日覆は香風が一ぱい孕んでその下には宰相や將軍や國王の座が設けられてある。

兵士達は、その勇健な體驅と、平生の訓練を瞭きり眼立たしめるために、それ



どれ部隊によつて異つた服装をつけてゐる。愈々閱兵の式が始まると、歩兵から騎兵、騎兵から長鎗隊へ、長鎗隊から象軍へ行進が波のやうに傳つて行つた。殊に象軍の間には、音楽隊が混つてゐて、劉曉たる樂音が四方に響き渡ると、國王も觀衆の人々も、その煌びやかな威嚴と、整列の美事さに全く熱し切つて、思はず歡呼の聲をあげた。象軍の次は旗隊である。幾千本の軍旗は盡く戰勝の桂環を結びつけてゐた。その次には戰車隊である。六頭の白馬に水色の戰車が二輛ついてゐるのである。人々は旗隊が動き出すとなせか俄に打沈んで來た。毎年の閱兵式に殆ど無事に濟されたことのない戰車の行進を氣遣うたからである。今日も戰車が動き出すと、觀衆の顔には軽い嘲笑さへ浮び出てゐた。けれどそれは永くは續かなかつた。戰車隊の行動は、今迄とは殆ど別物のやうに、すこぶる鮮かなものであつた。恰度白鳥が飛ぶやうに、橢圓、三角形などの行進を自由にやつてのけた。人々は熱し切つて雙手を揚げ、華と云はず、果と云はず、自分の持つてゐ

る總てのものを庭上へ投げ出した。

國王はすぐに此不思議な行動の指揮者を、召し出すやうに侍臣に命じた。

「それはもう月半ばも前のことであります、新しく軍隊を募集してゐました際應募兵の一人として採用したのですが、まだ一度も訓練に出たことはないやうに思ひます」といふ侍臣の前置きにつれて、不思議な兵士は國王の前に出た。國王は鄭重に細かに尋ねる。

「卿の姓名は何といひますか」。

「私は一切勝者と申します」。

「卿よ、私の前でそのやうな言葉を使うてはなりません」。

「王よ、私の言葉は眞實であります。私に虚言はありません」。

「卿よ、私は幾度も〳〵戰場を往來した。私は多くの場合負けたことはなかつた。けれど私にはまだ〳〵戰ふべき澤山な強敵が控へてゐる。だから私にはまだ



一切勝者と名告るだけの自信がない。聞くところによると、卿はこゝへ來られてまだ月半ばも経たぬとのことである。それにしても餘りに自信が強すぎはせないでせうか」。

「王よ、一切勝者とは一切知者の名であります。世の勝者は唯かりそめの名に過ぎません。何となれば、戦は人々のいのちを削り取り、甲の所有を乙に移し、乙の所有を丙に移し、丙のものを甲へもどすだけであります。大王はいつも敗者の物哀れな泣言を聞かれる。けれど、それは決して哀れを乞ふ泣言ではない、恐るべき復讐の呪言であります。哀れな姿の中にも、いつか勝ち誇るべき決心の色が漾うてゐるのをお氣付にはなりませんか。かうした感じは、常習の賭博者にはよく解つてゐます。賭博者は物品を賭けるが、世の王者達は人民の生命を賭けてゐます。然もその勝利は永久の勝利ではなく常に不安に充ちてゐます。一切知者は賭博の上で勝負を決する前に、賭博そのものゝ不眞實と戦を挑みます。不眞實

が根絶さるゝまで戦の手をゆるめません。我等はかく戦ふときに常に一切勝者の自信を得るのであります」。

「卿の言葉には力が籠つてゐる。卿の思ひのまゝに語らるゝがよい。私はどんな求めにでも應じませう」。

「大王よ、あなたは度々戦場に出られて、戦勝の人と戦敗の人とを目前に見、その差異の如何に大なるかを御覽になることとせう。戦勝と戦敗とは人生に於いて幸と不幸との差異に等しいものであります。そは殆ど自分の力で如何ともすることが出来ない運命の戯弄によつて左右されてゐます。前に轉輪王となるも、後には奴隸となり、上つて帝釋となつて諸天に奉事しましても、下つて糞土の中に生れるかも知れない、往反はまことに無量であります。變化は縦横に起ります。天上に生れ、姪女と娛樂のきはみをつくし、目のふるゝところ好色輝き、耳のふるゝ所妙音調べ優に、身に觸るゝところみな細軟でありましたも、いつしか劍林



の中に歸つて、身首所を異にする。時には須彌の頂に遊んで天女と共に曼陀池に沐浴し、寶華列るるところ清涼の快樂を横にしても、時移れば沸き返る焰の河に身心靡爛の苦しみを受けるのであります。

大王よ、これ等の有爲轉變の世相において、浮草のやうな生命を繼ぐことは、一切勝者の道ではありません。それは賭博者が、財物を貪求する心から、勝敗に對する興味や、その獲取物に對する所有欲や、手段としての排擠や虚控に全力を注いでゐるやうなものであります。この假面を脱ぐ爲に我等は全力を注いで參りました。古來の賢者達人は、この虚假の戦を去つて、眞實の戦闘を續けて來ました。彼等は常に「布施ほどこしを最勝となす」と叫びました。所有欲にかふるに布施を以てするといふ少しばかりの違ひが、凄慘な斷末魔の叫びと、新しき生誕の歡びの分れ目でありました。布施の勇士は、虚假の悲慘な戦ひや、生活の苦闘の間にも互に生命を敬ひ愛しむ育み行くのであります。眞個の戦闘に彼等の勝利は永劫

に續けられて來たのであります。

むかし、ある國の王様が鐵靴と、利劍と、金冠とを得たいと思ひました。王は自分の國と他國との國境で鐵靴を拾ひました。そして宮殿の門の前で利劍を拾ひました。けれど金冠だけはどうしても拾ひ上げることが出來ませんでした。或者はそれは天から降つて來るのだと云ひました。或者は否地から湧くのだといひました。王様は所々方々を探しましたが、遂にそれらしいものが見つかりませんでした。王様は疲れて宮殿へ歸つて來ました。その途中老いさらばけた乞食婆が、王様のお通りを拜んでゐました。ふと見ると乾からびた手の上には、塵まみれになつた涙がぽとぽと落ちてゐました。いかにもあはれと思召した王様は、その日に用意されてあつた王自身の食事を悉く恵んでおやりになりました。すると不思議にも乾びた老婆の掌が急に黄金の冠に變り、塵にまみれた涙が一滴々麗しい寶玉に輝きました。そして黄金の冠は、乞食の手から王様の首へ運ばれたので



した。それから王様は三つの寶を離さないで國を治めました。

大王よ、鐵靴は兵權であります。利劍は政權であります。そして王冠は教權であります。教權の金冠は最高の王者の手と、最下の乞食の手の觸れ合ふところに發見されるのであります。またそれは仇と仇との握手によつても見出すことが出来ます。教權とは總ての人間に平等の慈悲を與ふるのであります。教權の運行は王者の唯一の生命であります。

牛が水を渡ること

導者、行ひ正しければ

従者も亦正し

朋類ともがらの

樂しみを受くるは

王法の正しきによる

人々の念願は王者によつて統べられ、王者の權威は正しき教權の運行にあるのです。

大王よ、私は今過去の王者について、その實例を御話したいと思ひます。幸にお聞き下さるでありませうか。

「一切勝者よ、私は敬虔に承り度いと思ひます」。

—丁—



## 國境を越えて

## 一、地獄

焰は血のやうに燃え上つてゐた。一人突き落すと、油を注いだやうに紫煙がぱつと立つて火勢を増した。私はそれを小氣味よく眺めてゐた。旃陀耆柯ヂャンダキキはまだ飽き足らぬ風容おももぢであつた。彼は、孕女と沙門を焚いたらさぞ面白からうと私に告げた。私はそれを許した。彼は何處から連れて來たのか一人の孕女を伴うて來た。彼女は血の絞り取られた人のやうに全く力なく歩いて來た。そして私を見つけると、最後の力を絞りながら、私の許へ走り寄つた。無論彼女は私に命乞ひをする爲であつた。けれど私はそれを無造作に跳ね退けた。彼女は再三再四私の足や衣に接吻しては願つたが、私はどうしても承知せなかつた。彼女は最後に兒供の顔

を一目見るまでと云つた。私はそれさへ退けてしまつた。彼女は殆ど無意識に手を動かし足を震はせてゐた。奴隷が彼女を引捕へたとき彼女は失神したやうであつたが、唯私の無情を怨む思ひが彼女の眼の底に氣味悪い光を残してゐた。彼女の投込まれて焚けるさまは別に他の女と異ひはなかつた。唯心思ひか煙が二つに分れたやうな氣がした。私はやゝ興醒めてすぐに沙門を連れ出すやうに命じた。私は平生、小なまいきな理屈を捏ねて、いかにも聖者らしく装うてゐる沙門が、現前に地獄の焰を見て、どういふ態度を示すかを見たかつたのだ。私は一時も早く沙門を得たいと苛立つた。てうどその折、門前に行乞してゐた一沙門を捕へさせた。沙門は従容として入つて來た。私は彼に、直に猛火の前に立つやうに命じた。彼は無言で猛火の方へ歩んで行つた。彼の足は入つて來た時と別に異つてゐなかつた。それは常人が朝の食堂へ運ぶ足取のやうに見えた。私は全く期待を裏切られてしまつた。私は彼沙門を呼止めて曰つた。



佛國土の建設者

「汝は人か、人にしては餘りに神力が過ぎてゐる。私は汝を神だとも思ふ。然し判然はつきりとそれを断定することが出来ぬ。汝は何者であるかを語るがよい。」  
すると彼比丘は美音で一偈を頌した。

佛は一切の漏けつれを滅めつぼしたまふ

大慈悲比ぶべきものなき

最勝のりの法の師ぞ

我は是佛弟子

「正法」の力により

一切の有もつに著せず

人中の牛王のごと

み佛は自ら調へ、他をも調へたまふ

み佛のしつらひ給ふみ力は

いま我をして三有さんごうの獄ごくより脱だつれしめぬ。

私はこの沙門の態度と、そを育んだ「法」の力に深く魅せられてしまつた。私は焰えんで以て沙門を焚き殺さうとした。けれど沙門の心に燃ゆる「法」の焰は、現前の焰を焚き亡ぼしてしまつた。そのみではない。私に此計劃を勧めたあの旃陀者ぢんだしや柯かが、自分で造つた火口へ己れ自ら飛込んで行くのを見た。私は茲に始めて現前の焰は、私の内心に燃えて居た貪婪の焰なることを知つた。私は清淨な沙門の前にたつた一本の無憂樹を手折つた廉によつて、五百の宮女を焚殺すべしと命じた心が、わけもなく曝け出されて、恥しいよりも空恐ろしく感じた。

阿育王が即位してから八年目のことである。彼は、祖父旃陀羅笈多ぢやんだらぐたの建設した

貪愛より正法へ



大帝國の遺企を継ぎ、南印度東海岸に添うた一大王國カリンガを併呑すべく、百萬の軍勢を動かしてゐた。彼は毎朝、新らしく齋される戦勝の報に、張切れさうな歡びをたぐへてゐた。戦が豫期の如く、帝國の勝利に歸し、澤山な兵士が勝利の誇りを荷ひながら、凱戦の途に上つたと聞いた時には、彼は何者にも比べやうない幸福を、天に向つて感謝した。戦の詳報が、矢のやうに次から次へ報告されると、國民の歡びも益々その熱度を増して行つた。

ある日、戦ひの結果、收得された獲物を告ぐる使者が、王前に達した。それによつて「捕虜十五萬、殺戮十萬、それに伴ふ死傷者はこれに數倍す」といふ報告であつた。今迄心地よい談笑を、四方の人と交へてゐた阿育王の顔には、俄に不安な色が流れ始めた。彼は今迄ついぞ思つたことのない惨敗者の身の上かふと思ひ浮んで來たのである。彼の目には、色々の惨事が瞭然と走馬燈のやうに寫つて來るのであつた。幾多の壯丁が戰場に血まみれになつて争うてゐる間、若い妻や

老いた父や母が、深い不安に襲はれてゐるさま。それに悲惨な屍となつて再び故郷の土を踏むことの出來ない壯丁の斷末魔の模様。また故郷の人々がその戦死の報しらせに接した折の有様。それらは殺戮された十萬の一人々々に起つた悲痛な現象であつた。自分達の歡びは悪魔に魅せられた歡びである。呪はれた歡びである。幾十萬の呪がこもつてゐるのだ。彼の歡びの裏には、かうした哀傷の心が泉のやうに湧き出して來た。そしてその哀傷は永く毒蛇のやうに胸の底に秘められて行くのであつた。それから彼はなるべく人々を遠ざけ、宮殿の寂かな部屋に籠つて日夜冥想に耽つて見たが、彼の心はどうしても落着かなかつた。そののみか彼の神經は益々鋭くなつて、時々夢幻の間に恐しい地獄の焰を見るのであつた。旃陀者チンダヤ柯カの地獄は、冥想のある夜、彼を襲うた悪夢の一であつた。彼は餘りの恐しさに信頼してゐる或大臣の前へ、そつと打開けたのであつた。大臣は王の悶えを慰む爲に、澤山な學者や、哲人や、僧侶を宮殿に召して種々の人生觀を話さしめた。



けれど一人として彼の悩みを抜くものは出て来なかつた。

ある日彼は、殿中を逍遙して、高廊から惱ましい瞳を地上に落してゐた。地上には澤山な群衆が、欲の鈎に牽かれる魚のやうに、苛立たしく動いてゐた。そのうちに、一人の沙門が、ゆつたりと迫らずに歩いて行くのが眼に止つた。沙門は儀容<sup>すがた</sup>少しも憍らず、心寂かに、しかも圓滿な愛を衆人に施しながら、食を乞うて行くのであつた。王はその神々<sup>かうぐ</sup>しい姿に引付らるゝやうに眺め入つた。そして恭しく沙門を請じ入れるやうに命じた。沙門の姿は目前に見ると殆ど光のやうに輝いてゐた。王は自然にその尊さに射られて度かに下座についた。その時沙門は、王の哀傷のころろを透見して一偈を興へた。

覺むるは不死の道

思慮なきは死の道

覺めて怠らざるものは

まこと不死の道に入る、

思慮なくて日を消せば

其の身既に死するが如し。

王はこの眞實の言葉によつて、自分の胸に一道の光明を認めることが出来た。そしてこの惠深き沙門をして永く自分の友たらしめんと希つた。王は歡びながら沙門の名を尋ねて見た。沙門は「我はニグロドハなり」と答へた。——ニグロドハ——王はその名を聞いてハツと驚いた。それは王に取つて最も深い懺悔の種であつたからである。王は新しく見出された罪痕に懼れながら、思はず自分の顔を覆ひ陰したが、その掌の下からは、熱い涙がはら／＼と零れ落ちてゐた。

## 二、懺悔



阿育は澤山の兄弟が有つた。彼の兄はスマーナと云つて父王ビンヅサラの寵兒であつた。阿育は年少の折から容貌が甚だ醜<sup>みにく</sup>く、氣性が荒々しかつた爲に、父母の寵愛を受けることが困難であつた。彼が成長すると、父王は早くも偏強ウヂエーニーの副王として、彼の地の收斂を司らしめた。彼は命に従ひヴェヂツサ城に留ることになつた。彼はその間に土地の富豪の女<sup>むすめ</sup>デーグキーと戀に陥り、マヒンダとサンダグハミッターの一男一女を生んだ。マヒンダが十二、サンダグハミッターが十の時であつた。父王ビンヅサラは、自分の後を長兄スシーマに委ねて此世を去つた。薨去の報を聞いた阿育は、直にヴェヂツサ城を捨て、摩竭陀に歸つて來た。その時既に彼の胸には怪しい野心が氣味悪い鱗のやうに燃えてゐたのである。スシーマは輕卒な王子であつた爲に、大臣達に囑望されてゐなかつた。大臣達は寧ろ阿育をして王位を繼がせたいと希つてゐた。阿育はかうした囑望に當嵌る爲に、殊更自分の野心を外へ現さなかつた。その僥倖は正しく適中した。大臣

達はスシーマを弑逆して程なく阿育を王位に登らしめたのである。

阿育の野心と、大臣達の無情を知つた、スシーマの妃は、宮城の西門から遁れて、或る賤民の部落に隠れた。妃は既にスシーマの胤を宿してゐた。

天ニグロドハは此哀れな妃を擁護してやらうと思つて、寂かな山林の中に住居を造り、彼女が安全に子を産むよう<sup>よう</sup>に取計らつてやつた。やがて月のやうな美しい兒供が生れた。天ニグロドハは自分の名を直にその兒につけてやつた。妃は天ニグロドハの厚き情によつて、賤民の女王となることが出來た。賤民は恭しく彼女に仕へ、忠實に働いて呉れた。その間星霜は七年を夢のやうに流れた。

ある日上座の大徳ヴァルナはこの賤民の街を通つたが、たま／＼小兒ニグロドハの姿を見てひどく驚いた。その兒の容貌のうちに、既に阿羅漢の相が具はつてゐたからであつた。大徳は、母妃に請うて小兒を出家の中へ加へた。ニグロドハは、師の愛<sup>いつくしみ</sup>深い訓育によつて、やがて阿羅漢の果を得た。



ニグロドハは、久しく遇はぬ母を訪ねたいと思つた。彼は都の南門を横切つて賤民の村に行く途中、ふと阿育王に認められたのであつた。

「ニグロドハよ、許して呉れ。私は御身の父スシーマを弑した。私は若しも御身の母が見つかつたならば、直ちに殺すように嚴命した。私は御身の父を殺したばかりでなく、御身の母をも、又御身をも殺さうとしたのだ。そのもとは私の卑しい野心からである。飽き足らない貪婪とんらんの焰は先づ私を焚き、その災を御身に迄及ぼしてしまつた。ニグロドハよ、御身は正しく敵を目前に眺めてゐる。御身の内心は定めし私の胸に、ヒシ／＼と恨の白刃を差込んでゐるだらう。ニグロドハよ私はこの白刃を御身に渡さう。そして思ふ存分私に突き立てるがよい。私は正當な御身の刃を甘じて受けねばならないのだ」。

ニグロドハの眼には、哀れな王の姿がいちらしく映つてゐた。そして王の心からなる懺悔の涙を尊く認めたのであつた。彼は正しき敵を眼前に見ながら、然もそれを愛しむことが出来るのを、佛に向つて深く感謝した。彼は水のやうな静さを以て王に曰つた。

「大王よ、沙門に何の恨が残つてゐませう。私はニグロドハに異ひありませんが今は既に沙門であります。私のすべての貪りや恨みは、上座ヴァルナの御許に於て消されてしまひました。私には唯聖たうとい悦よろこびが充ちてゐるばかりです。敵として恨むべき人は一人もありません。どんな恐しい盜賊でも、殺人鬼でも、どんな貧しい老母でも、卑しい奴隷でも、現前の王とふもに、私にはなつかしい同朋です。大王よ、人々のなしわざは一として法から離れないのであります。佛陀の慈悲は萬人の上に平等に惠まれてゐます。人々はこの慈悲の育みによつて、毎日の業をいそしんでゐるのです。あなたが仇だ味方だと御思召すのも、佛陀の慈悲から眺めますと、同じ同胞はるかであるのです。大王よ、ニグロドハはあなたを敵などとは思



ひもよらぬことでもあります。あなたの業に助けられて、私は今遇ひ難く入り難い  
 み法の慈悲に遇はして頂きました。私はあなたの恵みを受けなかつたら、今頃は  
 やはり醜い業の奴隷となつてゐたかも知れません。私はいま、衷心から、あなた  
 に感謝したいと思ひます。大王よ、私は今深く過去の宿業を感せずにはをれませ  
 ん。それは遙に遠い昔でありました。——二人の兄弟があつて、蜜を鬻いでゐた  
 弟は之を賣り、兄は蜜を採りに出かけるのであつた。ある日修道者が傷を負うて  
 街へ出て來た。修道者は蜜を賣る家の前に立つて少し恵んで下さいと乞うた。弟  
 は喜んで、修道者の爲に入用なだけの蜜を恵んでやつた。修道者は恵まれた蜜に  
 よつて傷を癒すことが出來た。その時弟は密かに願つた「我願くば此供養の徳に  
 よつて、地上の全てを領し、權力並びなき王となるように」と。その後兄が歸つ  
 て來て云つた。「何處の修道者だとも解らない奴に供養する馬鹿があるか」と。け  
 れど正しくその修道者を見たのでないから、内心には、ひよつとすると弟の供養

も無駄にはなるまい、とも思つてゐた——。大王よ、此弟といふのはあなたであ  
 りました。その時慳貪であつた兄は私でありました。洵に過去の宿業が現在に現  
 れて參つたのです。あなたの所作も、私の所作も、總て宿業によつてのみ解き得  
 らるゝのであります。私は過去久遠の昔から、あなたと兄弟でありました」。

沙門ニグロドハの言葉は、王にとつて、始めは恐しい呪のやうに聞えてゐたが  
 だん／＼悪魔の影が消えて、なつかしい兄弟の思ひが、胸から全身の血をゆるが  
 せていつた。そのみか、永い間、胸の底に秘められてゐた、カリンガ征討の悲  
 恨の情が、太陽を畏れる毒蛇のやうに、いつしか姿を消してしまふのであつた。  
 一度は戦勝の報しこせで王の胸は歡喜に充たされたこともあつた。けれどそれは東の間  
 の歡びであつた。しかしいま王の胸に燃えてゐる歡びは永劫の歡びであつた。王  
 は寂かに體を起し、掌を合せ、佛陀を念じ、佛陀の慈悲の前に、すべてを懺悔し  
 たいと思つた。



佛國土の建設者

我は佛に歸依しまつる

法に歸依しまつる

聖弟子に歸依しまつる

我いまつくりし業のすべてを

み佛のみまへに懺悔しまつる

願くば、み心のうちに攝めしめたまへ

深き恭敬のこころもて

み佛につかへまつり

大地が麗はしく莊嚴るゝまで

常に精進はげむて止まるなけん。

この時から阿育王の兵戦は終を告げ、勇ましく法戦の門出かどでに上るのであつた。後王は天下に宣してかく云つた。

過去長時、數百年間、生物に殺害、有情に殘害、親族に侮慢、波羅門及び沙門に非禮なるもの増したり。

然れども今は天愛善見王が達磨を實行するに由り、戰鼓の響に代はりて、法鼓の響聞え、天界の列車、象群、炬華等の光景は民に示さる。

過去數百年の間興らざりしに、現今に於ては天愛善見王が達磨ダハルマの宣揚に由り、生物殺戮の停止、有情殘害の禁斷、親族に恭謹、波羅門及び沙門に敬虔、父母に従、長者に順なること增長す。——磨屋語文第四章。

天愛善見王は灌頂第八年迦餞伽カリンガを征服せり。

十五萬人は捕虜となり、十萬は戮せられ、又その數倍の衆は死したり。



迦餞伽の併呑以來、天愛は熱心に達磨を護持せり。達磨に歸依せり。又達磨の教規を宣揚せり。

天愛は迦餞伽の征服の爲に痛恨を感せり。所以者何と云ふに、未だ服せざりし國の征伐の間、民の殺戮、死亡及び捕虜と爲ることの起るは如何ともし難し。これを以て天愛は深き悲痛と悔恨とを感じたり。

されど天愛には尙一層の憂惱を感ずる他の理由あり。所以者何と云ふに、かゝる國に總べて歸依の誠實もて、長者に従順、父母に従順、教師に従順、朋友、知己、同僚、親族、奴隸及び繇僕に正遇を實行する波羅門及び沙門、諸宗徒及び俗人等の住すればなり。その國に住めるかゝる民も、慘虐、殺戮及び恩愛の別離に會す。

假令みづから保し得る人と雖も、その哀愁は消せずして存す。殘害はその朋友知己、同僚及び親族に到り、かくて慘虐は獨り免れたる者に被及す。總べてか

かる災殃を布けるは天愛の恨事なり。凡そ國として波羅門及び沙門の外、尙爾餘の者をも含めるかゝる部衆の在らざるはなく、又國內の處として、某の宗旨を信せざる民あることなければなり。迦餞伽に於いて殺戮せられ、捕虜と爲り又は死に致されし人々の百分の一乃至千分の一の喪失も、今や天愛に取りて深き悔恨の事なりとす。

假令人ありて傷害を加へむとも、天愛は能く堪へらるべき限り堅耐忍辱せざるべからざることを持す。

天愛は、その領土中の林族にすら、天愛が懺悔に基いて獲たる惻隱の情ありて彼等の歸法を求め、彼等に告ぐるに、惡業を避けよ、以て汝の覆滅を免れむとの旨をもつてしつ。所以者何と云ふに、天愛は一切有情の安固、欲の調伏、心の平和及び歡喜を願へばなり。

天愛以爲へらく。達磨に依る征服はこれ最勝の征服なり。こは又天愛の爲に、



その領土並びに六百由旬を隔つる一切の隣國(各國名を略す)にすら布かれて、  
到る處、人は天愛に依りて宣揚せられたる達磨に歸せり。

これ等天愛の使臣の入らざりし地すら、達磨との和合に發したる天愛の宣揚を  
聞くや否や、人は今達磨を實行し又實行を相續すべし。

こゝを以て征服は到る處に宣布せられ、到る處に宣布せる征服は歡喜の情を起  
す。歡喜は達磨もてせる征服に存す。この法語の録せられたる進志は、即ち朕  
の諸子及び諸孫の成るべく新なる征服を布くことを務なりと憶はず、又干戈も  
て征服に従事する時と雖も、忍辱及び温厚に適悦し、又唯眞の征服は、現世並  
びに後世に益ある達磨に依りて布かるゝことを惟はむが爲なり。總て彼等の適  
悦をして現世並びに後世を益する精進の適悦たらしめよ。——磨崖語文第十三章。

### 三、供養

ある日、王とニグロドハとの間に次のやうな問答が交へられた。

「上座よ、世間には御身のやうな出家は數多くありますか」。

「大王よ、佛陀の御教に生きる弟子達は澤山であります」。

「上座よ、私は澤山な比丘達を供養し、尊い御法を人々とともに承り度いと思  
ひます」。

この問答が終ると、王は直に使者をして諸方に正法を修しつゝある比丘達を索  
めさせた。旬日を経ずして、無量六萬の比丘衆を得た。王は歡び恭しく眷族、朋  
友、侍臣並びに同姓を召して告げて曰つた。

「自分は今大衆の比丘達に供養をしようとする。自分は何者を供養しても惜ま  
ないであらう。座席、洗水、侍者、くさんくの供養の物品は、速に恰好に之を整  
へ、威嚴を損せないやうに氣をつけて下さい。又庖人達わうりにんは迅かに乳糜、菓子、淨  
器を調へ、餘末なことがあつてはならない」と。



そして道路を掃除し、白砂を撒き、道の側には五色の花を飾り、街の辻々には花環の緑門を作り、その間に壯緑の芭蕉を植ゑ、水瓶を備へ、又旗を立て、城内に鼓を鳴し、薫香をたき、伶人をして千種の樂を奏せしめ、夜は香木に香油を注いで炬火を點するやうに命じた。

やがて最も幸ある麗はしき日は到來した。王は帝釋天の如くに盛装し、別園難陀園に大衆を迎ふべく宮門を發するのであつた。侍者は王を乗せた白大象の後にあるひは車で、あるひは馬で、あるひは歩で、花環、香花、天蓋、並びに旗旒を麗かな風に靡かせながら扈從した。王城の民は、武士と云はず、僧侶と云はず、商人、奴隸の別なく、花を投げ、香木を焚き、とりどりの音樂を奏しながら、異口同音に王の幸ある生涯を祝ぎあふのであつた。

王の一行は難陀園についた。王は白象を降りて比丘衆の處に往き、恭しく掌を合せ大衆の答禮を受けた。王は溢るゝ歡を胸にたゞへながら、更に大衆に近づいて曰つた。

て曰つた。

「大衆よ、我に悲憐を垂れよ」と。

言ひ終つて、僧衆上座の鉢を承け、むせぶばかりの香高い華をそれに盛つて再び曰つた。

「それでは私が御案内致します」と。

かやうにして、一層麗しい行列が再び難陀園から王宮まで續くのであつた。行列が廣々した王宮に全く呑み込まれてしまふと、王は僧衆に備への乳糜や、くさぐさの價高い美食を供し、更に一々の比丘に衣一領、上履、眼水、油、天蓋、その他糖汁蜜を供へた。かやうに喜捨供養が終ると、王は大衆に尋ねられた。

「大衆よ、世尊は、我々に示すに幾程の法門を説かれてありますか」。

僧衆の上座は、衆に代つて答へる。

「大王よ、佛の説き給ふみ法は意味深長であります。人々の性情、稟性、教育



等によつて各々法門は分れるのであります。人々は自分の個性に最も適切な法門を取つて一切の苦患を離れ、甘露の法悦にはいるのです。だから人々が無数である限り法門も無盡である譯です。けれど數に於て略定められてある法門は、八萬四千であります。

「大衆よ、私は心から佛陀の慈悲を歡喜いたします。私は八萬四千の法門が、地上の人類のすべてに行き渡るやうに、地上到る處に八萬四千の精舎を建てたいと思ひます」。

かくて正法宣傳の爲に、九十六億の金を用意すべきことを約して大衆供養は終りをつげた。

麗かな太陽は、一切衆生の覺醒の聲を聞いて歡び勇みながら西の天に歸つた。僧衆は、佛陀を念じ、法を念じ、自分自らを念じ、王土の無窮を祝ぎつゝ、寂かに退散するのであつた。

#### 四、出家

そのむかし、釋尊は成道したまうてから第四十四年の雨季を、祇園精舎に過されてのち、靈鷲山に歸られ、この時を以て、妙法蓮華經を完結し給うたと傳へられてゐる。

釋尊は法華の説法を終らせたまふと、山を降り北の方へ歩みを運ばせられた。なつかしい那蘭陀村や、忘れがたい尼連禪河を過ぎたまうた釋尊は、やがて殞河の本流に近い華氏城に入らせられた。

世尊が城外の樹下に坐したまふのを知つた城中の人は、城を出て、遙に世尊の聖容の嚴かなるを望み、歡んで御許に到り、御足を禮して却いて一面に坐した。世尊は人々の爲に正法を守るべきことを教へたまふと、ひとくは謹みて、如來



と、聖法と、聖衆とに歸し、今より後、殺すこと、盜むこと、姪みだるること、詐まがはること、又酒に狂はざることを誓うて、世尊より「在家の佛弟子」たることを許されることとなつた。

世尊は、ひとりの求めに應じ、市に入つてくさぐさの供養を受けたまひ、夜になつて林に歸り、静かに一樹の下に坐したまうた。阿難は衣を正して座より起ち、禮をなして後、世尊の側に坐するのであつた。すると世尊は阿難に問ひたまうた。

「阿難よ、この華氏城は誰が造つたのか」。

「世尊さま、これは摩竭陀の大臣禹舍ウシヤナが、同じ大臣須尼陀スニタと共に國王阿闍世の命を受けて造つたのでございます。これは弗栗持國フリツヂに備へる爲だと申します」。

「禹舍が造つたと云はるゝか、あれは賢いものだ。此城は必ず榮え、賢哲群があきうとり、商賈集ひて、餘の國に破らるゝことはなからう。けれど久しき後には三つの

災があらう。それは大火と、洪水と、城の内外における謀反とである。この三つのものは、竟にこの城を破るであらう」と、仰られた。

翌朝、禹舍は、世尊が、諸の弟子共と共にここに来りたまうたと聞き、澤山な從者を隨へて城を出で、世尊の御許に參り、その御顔に喜びの色含みたまへるを拜し、恭しく御前に坐した。そして、明日は是非私共の供養を御受け下さるやうにと願うて、世尊の御許しを得た。禹舍は家に歸り、終夜室よもすがらを淨め、食を具へ、夜の明くるを待つた。

旦あしたになつて世尊は、禹舍の家に入りたまうた。禹舍は自ら度かに食をささげると世尊は之を心よく受けたまひ、懇に宣べたまふのであつた。

「敬ふべきを敬ひ、事つかふべきに事へ、博く施し、兼て愛いづくしみのこころが深い。卿は常に福祉さいはひを得て、正法を見るであらう。禹舍よ、卿、官にありて貪り、侈おごり、



僑り、虐げ、ほしいま縦な行があつてはならぬ。この五の行がなかつたら、後に咎なく悔なく、死んで苦を離るゝことが出来よう。禹舎よ、己れ自ら勤めるがよろしい」と、禹舎は謹んで教に順うた。

その日世尊は、直に城の東門を出でたまひ、涇河の流に向ひたまうた。雨後の水漲り、旅人の困づる中を、特に禹舎のしつらへまつた船で、ひとごとと俱に彼岸に渡りたまうた。

佛は船師なり

正法によりて苦海を渡り

諸の衆生をして

涅槃の岸を得さしめたまふ

と、人々は聲を同うしてたゞへまつた。

\* \* \*

二百五十年の後である。

阿育王は佛陀の法をいへに歸して後、そのむかし阿闍世王の建立したと云はるゝ、王舎城の頭樓那塔ドローナをはじめとして、世尊の遺骨を攝めた諸國の八塔を開いて、世尊の舍利を取り出し、これを八萬四千の寶篋に頒ち、民口一億の地ごとに一塔を建てることにした。華氏城の阿育寺アシュカラーマもこの時に出来立つたのであつた。

その落慶の式日、王は大官を扈從せしめて、臨御せられた。殊に王子マヒンダの凛々しい姿と花のやうな美しい王女サンガミッターの姿は、王自身の誇りでもあつたし、また國民の希望と歡びの種でもあつた。供養は極樂の莊嚴のやうに壯麗に行はれた。僧衆は法を讚し、民衆は幸多き摩竭陀を祝ぎ合ふのであつた。

大會が終らうとした時、上座目犍連モンガヤナ子帝須ブッタチツサは、寂かに王前に歩を進めて曰つた。

「法は、永へに、人々のいのちとなりよろこびとなつて、光り輝くことでありませう。大王、今あなたは、あなたのいのちとよろこびを、法のうちに求められ



ねばなりません。マヒンダ王子とサンガミッター王女とを、教團のうちで育みまゐらせたいと思ひます」。

九十六億の金を資出して愛法のこころを示した王も、この言葉を聞いては、しばし躊躇はすにはゐられなかつた。——いとしい王子が、ましてかよはい王女が、僧團に入ることは、俗の身を持つ自分に取つては死滅よりも苦しい。自分が草創の初めから、一日も手離さなかつた王子、殊に女の子は母親を慕ふものだ、母は故あつて伴ふ事が出来なかつた爲に、どれだけ淋しい月日を送つたことか。それが爲か、世間の父親よりも一層に深いなつかしみを有つて、自分を慕うてゐた。自分もどれ程この子等を可愛く思つた事だらう。——マヒンダは二十になつた。サンガミッターは十八である。一かどの年頃となつてみれば、この子等にも、思ひのまゝな樂みがさせてやりたい。さぞかし、ゆくすゑにはさまざまの望を抱いていろ／＼の歡びに充されてゐるだらう。——私ももう六十の坂を越した。私の力

も、もう永くは續くまい。たゞ樂しみはこの子達のゆくすゑに、幸多かれと望を囑するより外仕方がない。このまゝで行くならば可愛い孫の笑顔を見るのも遠いことではあるまい。——私にはもう一人クナラがある。けれど、あれは今タカシラにゐて、ついぞ便りをせない。私があるの身を思つて叱つた言葉を眞に受けてきつと私を恨んでゐることであらう。私には可愛い王子だが、あれからは恨めしい父だと思はれてゐよう。あれはもう私の許へは歸つて呉れなからう。私の愛に歸るやうなことはあるまい。——さうしたら私には、唯この二人の小兒があるばかりだ。私のいのちはこの二人を除いてはないのだ。「いのちを捧げよ」と上座は云ふ。けれど、けれど、けれど。——私のいのちは何か、この身か、私の愛か、——いや／＼私は曾て、自分に誓つた覺がある。「法の爲に自分のすべてを捧ぐる」と。確かに覺えてゐる。あのカリンガの役が終つた年であつた。私は始めて法の尊きことを知つた。私はこの肉身と貪愛とをすべて投棄て、ひたすら法の



偉力に信順した。それから今日まで、私は一々の行ひがみんな法に契うてゐると思つてゐる。人もそれを許して呉れた。——けれどこの子達まで法に捧げねばならぬといふことはどうしたことであらう。私には出来ない、私には出来ない事だ。——王の胸は極度に動亂してしまつた。王は唯二人の王子をじつと眺めてゐた。王子マヒンダは、王の手を執り、堅い決心を示した後きつぱりと云つた。

「お父さま、私は僧團に参ります。私は私自身の眞理に従ふ爲、またお父さまの幸福のために、私は歡んで僧團にはいります」。

サングハミッターも續いて云つた。

「お父さま、私も僧團に送つて下さい。私はほんとうの幸福を得る爲に僧團へ参りたいと思ひます」。

王は涙ながらに曰ひ聽かした。

「可愛い子よ、私を慫んでお呉れ。私はまだほんとうに僧團の生活が正しいと

は思つてゐないようだ。そこに幸福があらうとは思つてゐないようだ。私は形の上でのみ佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依して、ゐるようだ。まだ私のころには「法」の世界と、「俗」の世界が二つになつて隔り合つてゐる。御身たちは全く「法」に飲み込まれて行くのだ。それは本統であるには違ひない。けれどそれは餘りに淋しい、私の心はまだ、それに従ふ譯にはいかぬ。どうか慫れと思つて思ひ止まつてお呉れ」。

王子マヒンダは、王のこの苦しみを抜く道は唯出家をするに限ると思つた。そして機會は唯一度であるとも思つた彼は、王の願ひを退けて僧團に入る最初の志を翻さうとはしなかつた。

「お父さま、いまに解ります。私達を御許し下さいまし。私達はどうしても僧團にはいりたいのです」。

王は言葉が出なかつた。唯熱い接吻を二人の王子達に與へながら眼をつむつて



ゐた。その間に、王子王女は、僧衆にまぎれ込んでしまつた。

その夕がた、王子マヒンダは、目隼連子、摩訶提婆、末闍提を師として僧團に入り、王女サングハミツターは、比丘尼阿由波羅、曇摩波羅を師として比丘尼團に入つた。

## 五、悔 恨

夕暗がまだ全く地上を呑みきららないで、城を廻る壯緑の茂みが薄暮色の空へ、黒く暈かされてゆく頃、王は毎日の心遣ひで全く疲れきつた體を、獨り高殿の欄干にもたれかけてゐた。一日中照りつけられた林の樹々は、太陽の光が歸つてしまふと、漸く自分の憩み場所を得たかのやうに、そつと息づかひをする。それが

集つて涼しい風が諸方から訪づれ合ふ。かうした恵みも王は感せぬではなかつたが、胸のなやみは、いつかな消されさうにもなかつた。

過ぐるカリンガの戦ひ已後、王は達磨の實行により、戰鼓の響に代ふるに、法鼓の響高く、且つ廣く、人々の魂を叫び覺し、ひとくは生命と光と歡びに充されて行つた。けれど達磨の實行は、習俗の眼から眺めると、冷たい、淋しい、世捨人の所業に見ゆるのである。だから久しき過去世から愛慾の薰習に馴れきつてゐる王の胸には、ともすると遂行する意志と、引もどさうとする感情とが、醜い戰鬥を始めるのであつた。殊に王子マヒンダ、王女サングハミツターの出家は王の内心には、どれ程の痛しい事實であつたか知れなかつた。愛を全く奪ひ去られた王は、あけくれ王子達の安否をわづらひながら、阿育王寺の空の彼方を淋しく、恨めしく眺めてゐた。時とすると、王の眼は、遙にタカシラの空まで飛んでゆくのであつた。タカシラ、そこには王とアサンデミツターとの間に設けられた王子ク



ナーラがある。クナーラ王子は女にも見まがふやうな美しい王子であつた。王子の眼がヒマラヤ拘那羅鳥の眼に似てゐるといふので、その名を得た程の器量好しであつた。それに賢いアサンデミッターの性質とその教養を受けて伶俐に成長してゐた。王子マヒンダ王女サンダグハミッターが居なくなると、王はひとしほクナーラのことか思ひ出されるのであつた。——自分は一時、マヒンダよりもサンダグハミッターよりも可愛く思つた。その愛を受けるのさへ、彼は自分が獨占しようと思つた。二人の王子王女と俱に楽しく願けあうてゐた。母こそ違へ、三人の兄弟はいつでも、どんな場所にでも、全く一人のやうに仲よく遊んでゐた。けれど？彼が十七の時、私はふと忌しい噂を耳にした。私はアサンデミッターが死んで後、チシユラクシターを娶つた。彼女は心が餘りよくはないが、どこことなく自分を引付ける大きい力を有つてゐた。忘れもせぬ新月の鋭くかゝつて、菩提樹の葉が針のやうに光つてゐた晩であつた。私の驚いてゐる眼へ彼女の惱しい涙がにじみ込ん

で、私の胸には俄に憎惡の念が火のやうに燃えた。——あの賢いクナーラにさうした不届なふるまいがあらうとは思はなかつたが、私はそれ已上にチシユラクシターの涙を疑ふことが出来なかつた。私は彼の將來を想ふ一念から、否、自分の王者たる權威から、いやさうでもない、眞實は憎惡の一念から、彼に對して追放の命令を與へた。彼は尠なからず驚いたやうであつた。彼は無言で暫く考へ込んでゐた。彼が頭を上げた時には、あの拘那羅鳥に似た眼に美しい涙の玉が宿つてゐた。彼は私に不届なるふるまひの有無は別として、追放の命令をすなほに受けることを約した。私はそれを聽くとやはり可愛さが湧いて來た。それで私は、彼をタカシラに止まるやうに命じた。彼は出て行く時私の幸福と、彼女の幸福とを、同時に祈つて去つた。今から考へて見ると、もつと確かり事實の有無を調べねばならないのであつた。私がたゞ一途に彼女の涙を信じたものゝ、女は偽り多いものだ、それは恐しい惡魔の涙であつたかも知れぬ。それに彼女は餘り心がよ



くはない。自分の大切に守つてゐる法の道を毀さう／＼とかゝつてゐる。没くなつたクナーラの母は歡んで佛戒を受け、さまざまの慈善をしたけれど今の彼女は、強情にも、佛戒を受くるに反對した。マヒンダやサングハミッターが僧團に入つたことを談すと、卑しい嘲笑を投げた程の女だ。また自分の一ばん大切にしてゐる菩提樹に密かに毒汁を注ぎ込んで枯してしまはうとしてゐるとも聞いた。すればあの事件でも、或は自分を苦しめる最初的手段であつたかも知れない。クナーラに若しさうした卑しい所作がなかつたら自分はどうしよう。自分はクナーラに對して何の面目があるだらう。クナーラの純淨な性質からおすと、きつとあの事實は嘘であるに違ひない。クナーラはさぞ自分を恨んでゐよう。タカシラの草深い野邊から、華氏城の空を眺めて、恨の言葉を投げかけてゐるかも知れない。——今迄はマヒンダや、サングハミッターがゐた爲に、クナーラのことには餘り思ひ浮ばなかつた。がしかし、あの二人がゐなくなつた今では、何を見ても愁ひの種だ。あ

のクナーラでもゐて呉れたら、かういふ時には充分慰められることだらうと思はれる。それに彼は二人の兄妹とは違つて詩や歌が上手であつた。聲もよかつたし、樂器を奏することも上手であつた。殊に立琴の調べは、國中の伶人が、どれだけかゝつても、上越すことの出来ない程の天才的能力を有つてゐた。彼が城の高殿に上つて自分の作つた歌を、あのすきとはるやうな聲で、立琴を奏でてをると、空行く鳥さへ翼を止めて、宮の森蔭へ集つて來た。彼が城門の石段の上で、面白い民謠を手拍子で歌つてゐると、街の娘兒供は、蛾蟲のやうに集つて來た。彼が街を通ると人々はヒマラヤの拘那羅さまと云つては、あの美しい眼の色を褒めたへた。可愛い兒であつた。なせ自分はこの兒をタカシラのやうな草深い所へ追遣つたのだらう。あの兒はなせあの時行くのは否だと斷つて呉れなかつたらう。——あゝクナーラ、今日は一しほ御身の事が思ひ出される。も一度自分の許へ歸つて來て呉れ。もう一度、もう一度、あゝ御身は歸つて呉れない。……クナー



ラ。

王の眼には、クナララの姿や所作振りがあり／＼と浮んでゐた。殊に彼の眼は深い追憶の種であつた。いつであつたか、王はクナララを伴うて屈吒羅摩寺へ詣でたことがあつた。その時上座耶舎は王子の眼の餘りに美しいのを見て、世の無常を説き、この王子の美しい眼もいつかその明さが消えてしまふであらうと云つた。その言葉は、單に引例として語つたやうでもあつたが、あるひは眞個にクナララの眼が潰れる豫言のやうにも聞えた。王は過去の追憶に幾度も深い吐息をついてゐた。

夕暗が壯緑の茂みを吞み盡すと、今迄訪れてゐた梢の風が、音もなく静まり返つた。月の出にはまだ少し早かつた。地上は光もなく働きもなくたゞ寂寞のうち、微に息づいてゐる。打さわいでゐた王の胸もいつしか自然の寂寞のうちに溶けゆく、肉體の疲勞が一時に機能を失つて、東の間の睡眠へ誘うていつた。

——そこはクナララ王子の部屋である。質素ではあるが、宏壯な宮殿の一部であるから、どこことなく崇高い美しさが籠つて見える。王子クナララは、今しがた、マヒンダ王子、サングハミッター王女等と楽しい晚餐を済ませて、自分の部屋へ歸つて來た。彼は、自分の部屋へ歸ると、いつも棚の上から美しい鉢を下しては見入るのである。それは彼の母アサンヂミッターが初めて僧衆に供養した時、彼女が手づから糜乳を盛つて捧げた鉢で、彼女が死ぬる時、特にクナララを呼んで形身のしるしに與へたものであつた。彼は母戀しさの情が湧いて來ると、いつもそれを眺めては慰めらるゝのであつた。今も彼は夕月の窓いつばいに差込んでゐる下で、美しい鉢に幾度か接吻をしてゐるのである。するといつの間にか、暗の中から王妃チシユヤラクシターの姿が浮いて出る。彼女は孔雀のやうな装ひで、さらでだに麗しい容姿が一層輝いて見える。彼女は全く足音を殺して王子の後ろまで歩みよつた。王子は、少しも氣付かないで鉢を一心に眺めてゐる。彼女の胸と王子の



肩とがすれ／＼になつた時、彼女は突然王子の肩を抱く。王子は思ひがけない出来事に氣を失つたが、すぐに彼女からつと離れて「お母さま」と呼ぶ。彼女は無言でまた王子の側へ走り寄る。王子の美しい眼の底に貞淑をさとす強い光が輝いてゐる。彼女はそれに氣付かぬらしい、手の中に掴んだ小鳥が思ひがけなく逃げて、あたりの木枝にとまつたのを追ふやうな苛立しさである。王子の強い光は男らしい腕を傳はつて刃の柄に及ぼうとする。彼女は始めて王子の意志を知り妖艶な顔が一時血の氣を失うたが、すぐに恐しい嫉妬の焰に燃える。「恨しい眼よ、覺えておゐで」かういつて、荒々しく部屋を出て行く。王子は鉢を抱えたまゝ惱ましく月を眺めてゐる。――

王が眠から覺めた時には、月が阿育王寺の森から抜け出でた頃で、あたりの梢からはまた爽かな涼風が生れてをつた。王はこの惱しい夢が現實のやうに思はれて仕方がなかつた。王のころは一刻々々破れて行つた。その破れゆくころに

救ひを齎す阿育王寺の初夜の鐘が響いて來ても、なせか王のころは癒されなかつた。王は佛を念じ、法を念じ、聖衆を念ずることを忘れて、マヒンダやサンダハミッターや殊にクナーラの名を呼んでゐた。其時どこともなく立琴の音が聞えて來た。墓場のやうな淋しい王のころに、突然熏じ込んで來る琴の調べは、それが浮れ女の歌ではなくて、魂の哀傷であつた爲に、幾分か惱みが慰めらるゝやうであつた。王の心は琴の調べに統べられていつた。王が再び自分に歸つた時、その琴の調べはいつか聴き覚えのあるやうに感せられた。だん／＼想像の糸が瞭きりして來ると、それはクナーラの好んで弾いたものだといふことが解つた。王は苛立つころを漸く壓えて猶もその音に聞入つた。やがて調べに混つて、歌ふ聲が傳つて來る。

いづれともなく落ちゆくころは

なさけなき世のさだめかも



淋しけれど忍びこらへて

つゆひとを、恨まじなわれ

王は歌を聞いて堪り兼ね、苛立たしく高殿から下りて侍臣に曰つた。

「王子が歸つて來た。クナローラが歸つて來た。早く、早く呼べ、早く呼んでお呉れ」。

王の言葉に驚いた侍臣は早速宮殿の中を調べさせたが、誰一人、王子クナローラらしいものを見出せなかつた。侍臣は王に復命する。

「宮殿の隈々まで充分探しましたが王子様はおゐでになりませぬ。門衛に訊ねますと、今日は誰方も御來訪にはならなかつたさうです。唯夕暮貧しい巡禮が二人門前に立つて食を乞ひましたので、可愛さうだと思つて今夜一晩泊めてやつただけだと申してゐます」。

「巡禮が來た、どんな巡禮であつたか。」

「二人は六十ばかりの爺であります。も一人は二十を少し越したかと思はれる程の若者で、盲目でございます。この盲目の巡禮はなかく、琴が上手で、今まで澤山な奴僕達にそれを聞かしてゐたさうでございます」。

「二十ばかりの若者で、盲目の巡禮、盲目、少し合點がゆかぬ、けれど何となくなつかしい。それではその盲目の琴奏きを呼んでお呉れ。私は今晚、夜通しの琴が聞きたい」。

侍臣はすぐに下僕に若者を伴ひ來るようにな命じた。王の前に召された若者は、恥しいのか、王の威嚴を畏れるのか、暫くは頭を上げなかつた。王は懇に若者に「汝は何處まで行くのか」と尋ねた。

「私は巡禮の身であります。何處へでも萍のやうに流れてゆきます。殊に御見かけ通り盲目でありますから。私の伴れの伴ひくれます所へ參るのでございます」。

「汝は何處から來たのか」。



「私はタカシラから参りました」。

「タカシラ、そんなら汝は、この華氏城から派遣された王子クナーラのことを知つてゐような」。

「は、はい」。

「あれは容姿よい男であつた。賢い若者だつた。定めて汝もあの王子の噂を聞いてゐるであらうな、あれは今どうしてゐるか、私に聞かしてお呉れ」。

「」。

「てうど二十になつた筈だ、定めし、今頃は手ごろな立琴でも奏いて面白い歌を歌つてゐよう。おふ、もう一度クナーラに遇ひたい。——巡禮や、もつところらへ寄つてあれの噂を聞かしてお呉れ。今夜は充分おまへから慰めて貰はうと思ふのぢや」。

「」。

「巡禮、おまへは初から餘りものを言はないやうだね。遠慮はしなくてもよい。もつと打溶けて思ふ存分話すがよい」。

「」。

「前程、私は立琴の音を聞いた。全くクナーラの奏いたのと同じ歌だつた。聲さへよう似てゐた。あれはおまへが奏いたのだつてね。おまへはあちらにゐる頃クナーラに教へられたのではないか。それにしても餘りによく聲が似てゐた」。

「」。

「おまへは、だん／＼退つて行くではないか。さう遠慮をしなくてもいい。では私がおまへの方へ行かう。おふ、お前は泣いてゐるね。どうしたんだ。早く涙をおふき。私がおふいてあげようか。——おふ、おまへは、おまへは、クナーラでないか。クナーラ、クナーラ、クナーラだ」。

「おふ、お父さま」。



「おゝ、クナラー、おまへは歸つて來た。おまへは歸つて呉れた。けれどクナラー、おまへの姿はどうしたのだ。そしてその眼は………」

「お父さま………」

「おまへはまだ私を恨んでゐよう、おまへをかうした慘めさに陥したのも、みんな私の罪だ。許して呉れ、許してお呉れ」。

「お父さま」。

「しかし眼はどうしたのだ。あの美しい拘那羅鳥のやうな眼はどうしたのだ。悪い病氣にでも罹つたのか、それとも怪俄でもしたのか」。

「お父さま」

「クナラー、聞かしてお呉れ、若しか誰かの恨でも受けたのではないか」。

「お父さま」

「若しか誰ぞの恨を受けたのなら、私は正しい裁きを與へねばならぬ。聞かして

お呉れ。のうクナラー」。

「お父さま、——私の眼は、私自身が抉り取りました。何一つ私の業わざでないものはありません」。

「あゝとうとう上座那舍の曰はれた言葉がほんたうになつた。けれど、おまへが自分の眼を抉り取るには深い理由があることだらう、私はそれを聞きたい」。

「お父さま、たとへ他人の手が私に加へられましても、みんな私の過去になした業なのです。私は誰も恨みません。誰を恨んでいゝものでせうか。私の業に泣くより外仕方がないので。私はさめんと心から涙を落します。そのとき私をじつと抱きかゝへて下さるみ佛をおろがみます。み佛も一しよに泣いてゐて下さいます。私はみ佛の御慈悲に救はれて、今では萍のやうに諸方を巡禮いたします。てうど盲目の私に取つて、御佛は、あの連立つて呉れます爺やのやうに思はれます。私と爺やは身一つのやうに流れてまゐります」。



「クナーラ、おまへはそれで淋しうはないか」。

「お父さま、私は淋しうも思ひます、けれどいつしかみ佛のお慈悲を汲まして頂きますと、どことなく歡びが湧いてまゐります。はてしない旅路が光り輝いてゐるやうに感じます。私はみ佛といつもしよで歩みますから」。

「うらやましいことだ。けれどおまへはもう他所へは行かないでお呉れ。お前のすきなマヒンダやサングハミッターのやうに他所へ行ってお呉でないやうにな」

「マヒンダさまやサングハミッターさまはどこぞへおいでになりましたか」。

「あれは二人とも出家をした」。

「法の道にはいられたことは何より歡ばしいことでございます。私も兄弟がみんな正しい道に入ることが出来て、こんな嬉しいことはありません」。

「おまへは歡ばしいか。私は淋しうてならぬ。どうかお前はそのまま止まつてお呉れ」。

「お父さま、私の止まることは、お父さまにとつて、永へに、淋しさ、哀しさの種を、植ゑるやうなものです。私は明朝早く出立するように伴の爺やから聞いてをります。私はここにじつと止つてゐる譯にはまゐりません」。

「おまへも行くといふのか、すればあゝ私はこれから何によつて生きて行けるのだらう。私を慰めて呉れるものは何にもなくなつた」。

「お父さまお聞き遊ばせ

うつしよに、たよれるものは  
秤の惱み多かり

「我三界の中において

獨り言ひ、獨り歩めり」と  
みほとけぞ、宣ひたまへ。

貪愛より正法へ



法にたよられよ

法は人のもと

わだつみの筏に似たり

淋しくも法にたよらば

歡とびは永劫はに、いのちは盡ときじ。

王に取つて最後の淋しい夜はかくしてたつた。

## 六、達磨

阿育王は王子王女の出家とクナラの訪問以來、全く「法」に一致することが出来た。彼は歡とびの餘り、天下にかく宣した。

天愛かく宣す

朕は二年有半の間、みづから勇猛に精進することなくして、達磨の聽聞者たりき。されど朕が僧伽に近づきし後、既に六年有餘の歳月を経て、みづから勇猛に精進せり。

當時膽部洲の眞神と思ひし諸神は、今や虚妄の神と爲りぬ。

これ精進の得果にして、啻に大人なるが爲に獲ること能はざるところ。乃ち小人と雖も精進に由りてみづから多くの天福を得る所以なり。

この準志の爲に教規を示す。曰はく。小人も大人もみづからこの期望に精進せよと。

朕の隣人も亦この訓を學ぶべし。かくて精進は永く相續せむ。

朕がこの準志は増長を致さむ。げに増長せむ。少くもその一半はいやましに増長すべし。乃至

この教規は前聖の宣揚せるところなり。(釋尊)の寂滅より二百五十六(年)にし



てこれを宣す。

と、この敕宣は天下到る處に崖石、石柱に刻せらるゝのであつた。

王はまた「法」達磨の何ものなりやを知らしむる爲に、次のやうな敕宣を出した。

天愛善見王かく宣す。

達磨は最勝なり。

さらば達磨とは何ぞ。

そは慈悲、衆善業、憐愍、眞實、清淨を要す。

朕は種々の法にて二足及び四足の物に、鳥に及び水族に、乃至あらゆる有情に心識の寶を與へて、多くの恩恵を施し、又爾餘の衆善を行せり。

朕がこの法語を刻せしめたるは、人のその教へに従ひて行じ、又その久しきに耐へむが爲なり。その教へに従はむ者は應に善を爲すべし。——石柱刻文第二章——

天愛善見王かく宣す。

達磨の仁施の如き布施、達磨に於ける友道の如き友道、達磨の慈善の如き慈善、

達磨の親縁の如き親縁はあらず。——磨崖誥文第十一章——

かく達磨「法」は、單なる道德律ではなく深き生命の光、魂の叫びであつた。だから王は敕宣にかくいつてゐる。

諸宗の徒には天愛が布施及び供養に多く留心せずして寧ろ一切諸宗の本質なるものゝ増長及び大増長を重んずることを告げざるべからず——磨崖誥文第十二章——

この法の宣揚は、内外共にその光を日毎に増して行つた。王は一切の臣民の幸榮を願ふことは己の子の如く、「一切の人は朕の兒にして、猶朕の子に對して、今世、後世、俱に諸々の幸と榮とを享けむことを望むが如く、一切の人に對して、朕は亦同じく幸と榮とを冀ふ」と云ひ、隣境の保護國及び希臘人の國々へは、人や獸の藥を送り、又藥草、蔬果を傳へて栽培せしめ、林住の蠻族を深く憐み、邊民



をして盡く不安を脱せしむることを冀つた。人畜に涼蔭を與へ又果實を給せん爲には尼俱盧陀樹を、園林には菴沒羅樹を植ゑしめ、又半拘盧舍(二里半)毎に井を穿ち、憩舎やすみばを建て、旅行者の便を圖つた。

政治の方面に於ては即位十二年に左の如き敕令を出してゐる。

天愛善見王かく宣す。

朕の灌頂第十二年、朕はこの命を發す。

朕の領土到る處、諸侯、持繩者(租税を徴し又刑罰を行ふ吏)及び地方官は、五年ごとに大會に參集し、他の政務に加へて左の達磨を宣揚すべし。即ち父母に順なるは善なり、朋友、知己、親族、波羅門が沙門に仁なるは善なり、生命の神聖を重んずるは善なり、驕奢及び暴言を避くるは善なりとのことこれなり。

僧衆も亦文字並びに言語に依りて、かく諸侯を教ふべし。——磨崖語文第三章——  
かく政務を擧ぐるに兼ねて、正しき教權たる佛法の宣揚を圖り、僧衆をして諸

侯を教化せしめ、又その効果の報告を聞き、第十三年に大官衙を設立して達磨大官、女人大官、地方巡察使等を置き、専ら法の弘布と布施行(慈善事業)とを督せしめ、みづから政務の指令を發し、常時臣下の報告を受くる機關を設け「過去長時の間、政務は指揮せられず。又報告は一切時に受けられざりき。仍りて朕は一切時に又一切處にそを備へたり。朕は食し又は妃房に、寢牀に、又は朕の密室に、朕の車乘に、或は宮園に在りとも、報告官は朕に謁して常に民の政務を報告すべく、民の政務は、朕何れの處にても速に之を指揮せん。又朕若しみづから口語もて吏に任ずるに、賜與を爲し、命令を執行し、又は某急事を以てし、乃至その政務に於いて僧中に諍論起り、或は虚偽生せば、朕は何れの時、何れの處にても直ちに朕に報告することを命じたり。所以は如何と云ふに、朕は決して朕の政務の勵精及び速辨をもて全く満足せざればなり。——磨崖語文第六章——  
と宣した。



司法權について王はかくの如く宣してゐる。

天愛善見王かく宣す。

朕の灌頂第二十六年、朕はこの法語を録せしむ。

朕は數十萬の民を治せむが爲に持繩者を任命し、これをして確實、無畏にその職責を全うし、民に安寧と幸福とを與へ、又恩惠を施すことを得しめむが爲に、彼等に許すに賞罰の自由を以てせり。

持繩者は民をして現世並びに後世に得益せしめむが爲に、その幸不幸の原因を孝察し、又達磨に應じて國民を戒飭すべし。

朕の持繩者は朕に事ふるに切に、朕の大官も亦朕の意を知りて、同じく朕に事ふるに敏し、而も要に臨みて戒飭を與ふべし、故を以て持繩者は熱心に朕の寵を得むとす。

人その兒を良姆に托して後安全を感じて、みづから良姆我が兒の注意に委身せ

りと言はむが如く、朕亦國の安寧幸福の爲に持繩者を任命し、無畏確實もてみづから任じてその職責を全うせしめむが爲に、朕は持繩者に賞罰の自由を許せり。

朕は行政に、處罰に、統一の存せむことの願はしきが故に、更に命令を宏む。

曰はく。死刑と決定せられ宣告せられたる囚人に三日の猶豫を許與すと。この間に罪人の親族はこれに勸むるに深き足念を以てし、その生を救脱せんことを望み、然らざれば、臨終の正念を進めむか、爲に願供を捧げ斷食を行すべし。

朕は罪人監禁の間すら後世に得益せむこと、及び民の中に自制と寛仁とを以て諸種の善行の増長せむことを願ふ。——石柱語文第四章——

是等語文によつて王の治蹟一斑を窺ふことが出来る。

## 七、法 戰



華氏城の四門外に、藥種を設け、病僧や貧しき病人に施藥せらるゝやうになつたのは、王の即位九年からのことであつた。かうした仁慈の施設は「王は人畜に蔭を與へむが爲に道路に尼俱盧陀樹を植ゑ、園林には菴沒羅樹を植ゑたり。王は半拘盧舍ごとに泉を鑿ち、憩舎を建て、又人獸の歡喜の爲に無數に給水所を設けたり。されど謂はゆる歡喜は小事なり。朕の行せる如き種々の德澤は先王これに世に與へたり。されど朕に在りては、唯人をして達磨に聽順ならしめむとの企圖のみをもつてこれを爲せるなり」と誥せられてある如く、それは内實的に佛法の増長に外ならなかつた。かくて佛法は上下貴賤の敬信を受け、益々興隆せることに及び、波羅門の傳統教學は愈々衰滅し、その教徒は生活の窮迫から、白衣、遊行、露形、外道を選ばず流るゝやうに佛門に歸した。これが爲、佛の經律を嚴守するものにとつては少なからぬ障害となつた。布薩(ゴシヤク)といふのは、月二回佛戒を誦し、互に策勵する會合であるが、異分子を含んだ教團ではこれさへ餘程六

ヶ敷くなつて來た。阿育王寺の上座目犍連子帝須は、如法の修業が困難になつたので、ひそかに笈伽河の上流アホガンガの山中に身を隠した。王はこれを聞き早速教團の革新を圖り正しき佛經及佛戒の結集を望み、全國に督して三藏に通じ智慧德行並び備はれる比丘一千人を選擇し、これを阿育王寺に集めて、目犍連子帝須を上座とする經典結集を行つた。實に即位十七年のことである。

佛典結集の業を卒ると、最勝の妙法を地上到るところに流布せしめん爲に、澤山な傳道師が四方の國々に派遣されるのであつた。或上座はカシユミール及びガンドハラ國に入り、憍惡なる龍種を平げ、ひとくくをして五欲の縛を去らしむる爲に譬喩經を説き、ある上座は、大神通を以てマヒーサマンダラ國にゆき、地獄の痛苦を説きて人々の現前の欲から遁れしめ、ある上座は、空中に飄揚してゾアナヴァーシにゆき無垢經を説いて五百寺を起したと曰はれてゐる。

王子マヒンダは入門より早や十二年の星霜を清淨な僧院に送つて既に上座とな



つてゐた。此傳道師派遣の企が起ると、彼は特に命せられて師子島教化の任に當ることゝなつた。上座五人と佛典に通曉した沙彌スマーナを伴うて、摩竭陀を發するのであつた。父王阿育は彼の行を歡び、師子島の王にくさぐさの贈品を托した。牛尾の扇子一、頭被一、劍一、天蓋一、上履、王冠一、瓶一、右片貝殻一、輿一、貝殻製喇叭一、殞河水、淨衣一億、金器並びに匙、手套、阿耨達湖の水一荷、黄色旃檀珍木、臙脂若干、龍族將來の眼水、黄色幼芽の果樹、オマタ珍藥、鸚鵡將來の山香穀一百六十車、などであつた。また敕書して「朕は佛法僧に歸依し、釋子妙法の俗弟たることを誓ふ。卿亦心を大勝者の無上法に沈潜し、以て其の導師に歸依すべし」と告げしめた。マヒンダは恭しく父王の膝下を去つて、その頃チエーチャニ寺に住してゐる母を訪ね、母の爲に佛陀の妙法を説き、菩薩戒を授けてうつし世の別れをつげた。

六月満月の日、師子島ミツサカミツサカの山嶺、アムバツトハラアムバツトハラの滑らかな石上で黄衣の沙門が禪定より覺めて、一人の沙彌を呼んだ。

「スマーナ。太陽は漸く上つたやうである。人々の勤めは初まつて來た。高らかに呼べ。人々よ勤行の時は來れり」と。

「上座さま、この山の中で誰に告げるのでございますか」。

「スマーナよ。師子島全州の人はいま耳そはだを時てゐる。これらの人々に告げるのである」。

かくてスマーナは聲高らかに叫んだ。

「人々よ。我等が勤行の時は來れり」と。

その時、師子島の王デーヴァーナデーヴァーナンヒヤチツサンヒヤチツサは、國民の爲に水祭を行はうとして、ミツサカミツサカの山嶺へ侍臣四萬人を従へて登る途中であつた。(竟)



彼  
女  
の  
出  
家



目次

一 波閣波提夫人のなやみ……………一  
(夫人の生立2—姉夫人の死と太子の養育3—太子の結婚、妃の生立、羅睺羅の生誕、太子の出家6—釋尊の歸城と羅睺羅、難陀の出家8)

二 出家の發願……………一三  
(釋尊の歸城と耶輸陀羅妃、釋尊修行中の妃の貞節15—羅睺羅に遺産を乞はす17—淨飯王の死と夫人及び妃の出家發願19)

三 佛陀と女性……………二八  
(阿難の生立とその個性28—女性の出家出願とその拒絶29—母の死とその印象35—繼母への愛成道から家庭說法へまで)36—比丘を誡める爲に説かれたる女人惡視の說法42—女性の心理的性的缺陷に就ての說法と女性の本質的生命權威(たましひの生立と人生の使命、兩性問題の根本的意義、權利義務の基本)46—佛性論と女人の修道問題(成道と生命解放のシーン)53—釋尊の教化態度に表れたる女性觀(釋尊の宣傳意志、社會現勢と布教方便、吠陀及び麻奴と釋尊の女性觀、傳統教學に對する釋尊の教學地位及性質、在家信仰と他力思想の萌芽)57—釋尊の性的經驗とその婦人觀(入定の形式、降魔、出家の夜に見たる後宮の醜態、太子時代の宮殿生活、キサーゴタミーの戀、在家の女弟子、難陀と許嫁の戀)71

四 比丘尼教團の成立……………九四  
(夫人、妃及釋種の女の出家再度出願97—阿難の取次、釋尊の女性教團創設に就ての種々の躊躇103—八尊師法の設定と女性出家の許可106)

彼女の出家

—

淨飯王の大葬がすんで、いよいよ明朝は、その一族から出られた釋尊を始め、難陀も、阿難も、羅睺羅も、みんなが精舎へ歸られるといふ日の晩である。その夜、十六夜の月が、銀沙のやうに流れこんで、さしものに宏莊な宮殿も、寂々と夜の哀傷へ溶けてゐた。昨日までの物騒しさにひきかへて、宿直の侍女たちも、大葬後のつかれで、死のやうな安眠を貪つてをる。それは、淨飯王の死を悼む、天地の慟哭の如くに淋しい夜であつた。

波閣波提夫人(Bh. Mahī-pajīpati)は、涙に細つた腕を、寢臺の手摺に靠せて傷々しげに起きあがつた。一どは、侍女たちの氣遣を霽すのに、寢臺へ登つては

彼女の出家



見たが、しかし、うつゝにもまどろまれる筈はなかつた。流しても流しても流しきれない哀別の涙は、とつおひつ夜を更けさせて、まんじりともさせなかつた。

「永い間寂しい時を忍んで来た。しかしもうそれも最後だ」。

そんな感じが、彼女の胸を、一ぱいに波立たせてゐた。幼くして拘利(Koli)城主阿菟釋迦(Anusikya)の愛姫と生れ、長じて姉の摩耶(Māyā)と一しよに、姉妹づれで従兄にあたる迦比羅城(E. Kapilavattu)の淨飯王(Suddhodana)へ嫁いだ。國は小さいが、それだけに政治も執りやすく、殊には温厚仁慈な王のことゝて、人民は腹鼓をうつて愉快な生活をし、王にも、また姉妹の夫人へもよく馴づいてくれた。王室の後宮でも、嫉妬や争ひの少ない、變態とした日が、夢の如くに流れていつた。しかし、さうした夢の底にも、人の世は決して充されるものはなかつた。時には、春の遊宴に血をわけた姉妹が、互に狂ひたつ嫉妬のほむらゝを、感傷的な篋篋の調べに、秘めこむこともないではなかつた。時には、はしたな

い下婢たちの告げ口にも胸を傷め、時には、一つ後宮で妬みあはねばならぬ、姉と妹の二つの運命の子が抱きあうて、更け行く夜を泣きあかいたことも、幾度かあつた。淋しくもあつた。悲しくもあつた。切なくもあつた。

しかし、それも、今はほんたうに夢と消え去つた――

彼女は、年老いても子供といふものを持たなかつた。姉にも與へられなかつた。月日は重なり重なつて、慎しみぶかい王も、たまには子のないことを愚痴るやうになつて来た。子のない女を石女うますめといつて、蔑すむ世習の中に育つて来た二人にとつて、それは何よりも辛い苛責であつた。王の愚痴は、恐しい罪でも犯したやうに、二人の胸を釘うつた。今では二人とも、お互に、どちらでもいゝ子供が授つたらと、妬を忘れて願ふやうになつてゐた。ところが、姉の方が、四十も過ぎ、半ばにもならうとする齡になつて、思ひがけなく妊娠した。流石に波閣波捷はじやばたいにとつては、あきらめの中にも、本能的な軽い感觸シヨツクを感せぬでもなかつたが、し



かし、永い希願が叶へたのだと思へば、容易に氣をかへて歡ぶことが出来た。いはんや王の喜びに至つては、宙に浮いて躍るやうなものであつた。聽て月がみちて、玉のやうな太子が生れると、王は待ちこがれた寶を得たといふので、目的が叶うたといふ意味の、悉達多 (Siddhāttha) といふ名をつけられた。ところが、姉夫人は、太子が生れられて七日目に、はかなくもこの世を去られた。王は固より波闍波提の驚きと悲しみは、どんなであつたらう。しかし、後にはいたいけない太子がある。彼女は、姉への義務や王への責任を、この哀れな孤兒の上に見出して、新しい歡びを、犇と抱きしめた。それから、以前にもまして、心からの楽しい生活を、迎へることが出来た。母様々と跡追ふ子供、それは世にも珍らしい怜い子として、家臣からも人民からも、囑望されてゐる。女として、これにまじたる幸福があり得ようか。太子は全く彼女にとつて、生命の玉だつた。しかしそれも、すつかり昔の夢と消え去つた――

月日の經過は、いつのまにか太子を立派な青年にした。その智は、まだ物の氣づいたばかりの七歳の頃から、波羅門の學者の婆提婆尼 (Bhadraṇi) といふ人を師として、波羅門たちの普通教育である悉曇 (Siddham 文字の學) の十二章や、五明 (一、音韻訓詁の學である聲明二、工藝技術の學の巧明三、禁厭藥石の學の醫方明四、推論考定の學の因明五、波羅門教の大意を教ふる内明) などの一通りを習ひ、進んでは、波羅門教の奧義である四種の吠陀 (Caturoveda) までを盡くして、堂々たる學殖を備へてゐられる。その武は、犀提提婆 (Kṣinidēva) といふに就て磨かれた腕がある。またその徳は、自らに生えついた、碧玉のやうな麗しさに、父や母の情の露が宿つて、うらくと人を吸ひこむのであつた。かうした人格は、じねんと、仇をも敵をも醉はすものである。淨飯王は太子を通じて、未來の轉輪聖王 (B. Cakkavatti) 世界の統一者を夢みられ、國民は、地上の樂園を期待した。さうするうちに、太子の胸にも、人生の謎が雲のやうに涌きたつて、それ



が紅い涙と結ばれて、ぼつりぼつりと降りしだく頃がやつて来た。その紅い雨をしたうて、燃えたつ胸を浸さうとする、若い娘も、固より數多かつた。そこには戀の波瀾が、小蛇の如くうづまいてくる。この波瀾をかきわけて、太子の豊かな腕に絡みついた、幸せ者が、耶輸陀羅姬 (Yasodhara) であつた。しかし、彼女の戀の勝利は、決して偶然の拾ひ物ではなくて、蓮池の水氣が荷葉の上に露と宿ると同じい、必然的な勝利であつた。彼女は實に、拘利城主須波佛陀 (Suprabuddha 善覺) の一人娘で、波闍波提にとつては姪、太子にとつては従妹である。血統をやかましく云ふ、印度貴族の間にあつて、純粹な釋迦種族の血を承けついでゐることが、何よりの誇負であつた淨飯王家にとつては、先づ第一の條件を、持つてゐた譯である。またその育ちも、雲深い宮殿の中に、たつた一人の兄提婆達多 (Devadatta) と二人きりで、親の愛をうけて来たことゆゑ、申し分のない貴族らしさを備へてゐる。固よりすがたもよかつた、教育もうけてゐた。

この美しい一つがひが、鴛鴦のやうに愛の清水を泳ぐ時、そこには、王室はいふまでもなく、山にも川にも、國を擧つて、潮のやうな歡びが涌き立つた。間もなく、二人の間には、羅睺羅 (Rohita) といふ愛の結晶が産ばれた。王室の歡びがいやさらに、繁らねばならない時が、やつて来たのだ。ところが、思ひがけなくも、その期待は裏切られて、太子は、花と玉とを後にして、すげなくこの世を隠遁された。

とうとうすべてが、昔の夢と消えたのだ――

しかし、波闍波提にとつては、まだ望みの綱が残つてをつた。それは、羅睺羅 (Nanda) といふ老兒が出来てゐたから、王國の相續だけは心配がなかつたからである。ところが、太子が出家されてから六年目の事であつた。摩伽陀國 (Magadha) の尼連禪河 (E. Neranjara) のほとりで、太子が「ほとけ」になられたといふ評判が



警鐘のやうに王室を驚かして來た。それから間もなく、太子が歸城せられるといふ報知を得て、王も夫人も國民も、狂ほしいばかりに喜びあがつた。みんな、今度こそは太子を止めて、國王にしようと思つた。彼等は、太子の出家を、世間並の波羅門の修業と一しよに考へて、山の修行がすんだなら、家に歸つて相續をするものと、思つてゐたからである。

ところが彼等の期待は、またも砂丘の如くに崩れてしまつた。その眼には、錦繡の太子に代ふるに、見る影もない乞食僧が映つて來た。その耳には、快よいあまえた肉の懐しみが聞かれないで、嚴肅な現實否定の說法が、重苦しく響いて來た。もうそれだけでも、先の喜悅が忽ちに、悲傷ないたみとなつて、止めどない涙が、一種の反感をすら伴うてくるのであつた。

しかし、その說法は厭くまでも、嚴肅であつた。拒否しようとしても、拒否することの出來ない恐しい力が、太子のたましひから、父や母や妃や家臣たちのた

ましひの中へ、轟々と壓しつけて來た。それは、岩や石に蓋はれて、地面の下を靜かに流れてゐた泉が、鑿井器で岩石がぶち破られると、錐のやうに噴出してくるやうなもので、太子の鋭い批判のメスが、五欲の胸につきさされると、どうにもならない壓力の反動で、彼等自身の生命の泉が、噴出してくるのに外ならなかつた。

「おゝみほとげよ」

太子の嚴肅な說法に、自づと垂れ下つてゐた淨飯王の頭は、わが子とも知らず、かく叫ばすには居られなかつた。それほどに血縁の間にも、もう太子はもとの太子でなくて、三界の世尊佛陀になつてゐた。仰ぎ見るその眼には、玻璃器のやうに透きとほつた、また満月のやうな世尊の顔が、巍々として露にうるんでゐることを、壓されるやうに感じ得られた。一たびは、譽ある釋種の王家から、かうした醜しい乞食僧を出したことを悲傷した彼等も、忽ち思ひかへして見れば、優曇



華の花よりも珍らかな、佛陀である。そこに昔の悲りと悲しみを、補ふに足る充分な、榮譽の光が投げられてをる。

ところが、またこの歡びも、すぐその日のうちに、消えねばならぬ運命が、雷の如くに落ちて來た。それは、釋尊が王宮を辭して、またもさだめない教化の旅に立たれようとせられた日に、いたく釋尊の人格にうたれてをつた、若い釋種の王子たちが、われも／＼と、磁鐵にかゝつた針の如くに、引きつけられて、釋尊の教團へ投じたことである。そのうちには、うら若い難陀も、無論加はつてゐたし、殊に、たつた七つになつたばかりの羅睺羅が「父上様、父上様」と後に縋つてそのまゝ教團の中へ吸ひこまれてしまつたことは、王室の人たちにとつては、もう悲愁ではなくて怒りであつた。直ぐに、羅睺羅取戻しの嚴しい使が立てられたけれど、しかし、ほんたうに兒を愛された釋尊は、濁つた五慾の水の中へ、放つておくことは、忍び難いことであつたから、そのまゝ羅睺羅は教團に止めて、父

王へは「爾今は年若いものは、親兄弟の許なくして、教團へ入ることは許さないでせう」と、答へられただけだつた。かうして譽ある淨飯王の血統は、とう／＼絶えてしまつたのである。年老いた父王の悲痛は、どんなであつたらう。たゞさへ感傷的な夫人の胸は、どんなにふるへたらう。

それから四五年の間、片足づつを殺がれて行つた淋しい淋しい生活が、王と夫人と羅睺羅の母の間に送迎された。そして、とう／＼王は、この世を去つてしまはれたのだ。

「永い間、寂しい時を忍んで來た。しかし、とう／＼最後の時が來たやうだ」  
長い／＼過去の追憶から蘇つた夫人は、幽かに漏れてくる、侍女たちの寢息を窺つて、そつと寢臺の上に取り直つたのは、その時であつた。



「お母さま」

涙から絞り出す細い、低い、しかし、紅絹を引裂くやうな血に濡れた聲に驚かされて、夫人は入口の方へ踵を走らせた。そこには、背から眞向に降りそゞぐ月光にむせんで、耶輸陀羅妃が立つてゐた。

「おゝ、妃どのではありませぬか」

夫人は、これだけしか云へなかつた。後は、涙にちんで聲が出なかつた。すぐ寢臺をおりて、妃を室の中へ招いた。妃もまた、胸の縫ちゅうれに絡んだ足を引摺つて仆れるやうに夫人の胸へ泣きくづれた。しばらくの間は、涙と涙が抱きあうて、お互の切ない悶えを、脈々と流しあつた。

「あなたのお心はよく解ります。かうしてゐる間も、涙を傳うてこの心臓へ、

波うつて来るやうな氣がします……」

やつとのことで、夫人から言葉をきつた。しかし、矢張り胸が悶へて、すぐあとが途切れてしまつた。

「けれども……けれども、世尊ぼとけさまも被仰いました。諸法は常住ではない。生れたものは死なねばならぬ、會うたものは……」

またしても、切れやうとする言葉をつとめて、やう／＼にこれだけいつた。その時、握り締めてゐた妃の手が、小笹のやうに震へ出した。「會うたものは、別れねばならない」、さういつて慰めるつもりであつた夫人の眼には、生木に釘打つやうな虐らしさが、映らうて來た。もう胸が塞つて、何も云へなくなつた。

「お母さま」

「おゝ」

二人は再び涙の中へ消えてしまつた。



しばらくしてから、今度は妃の方から口切つた。

「お母さま、妾は太子さまのお側へ参りたうございます」

「ええ」

夫人は驚いて妃から飛びのいた。妃の聲は前とは變つて、もう涙が乾いた如く、明晰はつきりしてゐる。その顔は、蒼ざめてはゐるが、きりつと締つてゐる。夫人は女だけに、女の一念といふものを知つてゐた。十幾年といふものを、黙々として孤閨を守つて來た張りきつた妃の胸も、いよ／＼明朝は世尊も羅喉羅も別れて行くのだと知つては、きつと破れてしまつたのだらう。さう思はずにはゐられなかつた。しかし、世尊はどこまでも昔の太子ではない——夫人はどう慰めていくのか、薩張り解らなくなつてしまつた。たゞしげしげと、妃の顔を見詰めてゐるだけだつた。

「お母さま、世尊ほとけさまは女の出家を許しては下さらぬでせうか」

母の常ならぬ愕きに氣附いた妃は、重ねてかう云つた。太子といつたのを世尊と直し、お側と云つたのを出家とかへて、驚く母に答を迫つた。實のところ、彼女の悶えは、夫人のその比ではなかつた。幾度か死を希つたほどであつた。しかしこの世にはまだ夫もゐます、子供も生きてゐる。強ちに望が切れた譯でもない。たゞその側に、仕へることの出來ないだけが、詫びしい惱みの根源ねづらひである。さう思ふと、死ぬ氣にもなれない。かうした望のない綱を望として、長い苦悶を忍んで來た。けれども、長い月日は、日一日と世尊に光輝あらしめた。そして、ますますそのたましひが、世俗のけがれから洗ひ清められてゆくことを、彼女の小さな胸へ、針挿すやうに、確かめさせるだけだつた。

てうど六年前、あの出家されてから始めての御歸城の際だつて、彼女は、どんなに望の綱をかいぐつてゐたことだつたらう。「もし太子さまに、少しでも妾を愛して下さるお思召があるなら、きつと、妾の室をお訪ね下さるに違ひない」——彼



女はその時さう思つた。そして、久々に會ふことの嬉しさと、愛の期待と羞恥とで、眞綿のやうにこんがらかつた胸を、孔雀のやうな晴衣の中に躍らせて、自分の室で待ち詫びてゐた。廳で徜徉とした足取が、長い廊下を流れて來ると、彼女は、つと立上つて衣紋を直して、室の入口に身を堅くした。そして、手で抑へるやうに胸をしづめて、出家前の太子を迎へる氣分を、引出さうと焦つてをつた。また、女らしい意地から、太子さまの方からお言葉の下るまで、自分は黙つて平氣を装うてゐよう、などとも思つてをつた。しかし、女の心は矢張り小さかつた。み顔ばかり、昔の懐しさを漂はせてゐられる、圓頂黄衣の隱遁者が、室の闕を跨がれた時には、彼女の慎しみは、栗の毬いぶのやうに、思はず中から破れてしまつた。釋尊も、いぢらしく思はれたのであらう。いつもなれば、嚴肅な説法もあるところを、今ばかりは、み足に縫つて泣きくづれた妃を、凝つとみつめてをられるだけだつた。父の王は、もう耐へきれなくなつて、妃をかき起し、そして、釋

尊に向うて、出家せられてからこの方の、妃の貞節を、いろ／＼に並べ立て、釋尊の心を引かうとせられた。太子が岩の根草の上に、粗末な黄衣一枚をつけて、苦行をして居られると聞いては、すぐ妃自らも黄衣をつけて、底い床に臥したり、地面の上に蓆をしいて寝たりして、苦行のほどを偲んでゐたといふこと。また、太子が一日に一粒の麻の實と一粒の米しか食べられぬと聞いては、すぐ自分も一麻一米の辛酸を味うてゐたといふことなど。——しかし、それらは少しも太子の氣を引く因たねにはならなかつた。

殊に彼女を、絶望の淵へ蹴落したのは、かけがへのない羅睺羅を、教團の手へ奪はれたことである。その日耶輸陀羅は、羅睺羅を呼んで王者にふさはしい身装みなりをさせて、「あの澤山のお坊さんのなかで、一番立派に見ゆるのがあなたのお父さまです。往つて、遺産を下さいませと願つておいで」と教へた。夫に望を斷たれた彼女は、狂ふ心を、我が子の上に救はれようとしたのである。いたいけない王



子は、母の教のまゝに、父の後を追うて宮殿を出た。しかもそれが、はからずも永い訣れにならうとは、どうして豫期することが出来たらう。

夫には捨てられた。最愛の子供は奪はれた。残されたものは、あつて詮ない陽炎のやうな自己のみである——それからは、暴風のやうに狂はしい朝と、死のやうに寂しい夜が、繩の如くにあざなつて、五六年を経過した。しかし、それでもまだ、太子を怨むやうな感情は、微塵ばかりも、彼女の胸には宿らなかつた。やはり、旅の人を待つやうな素純な愛が、太子の幻影へ抱きついてゐた。

「お母さま、妾はもう諦めてゐます。妾は、妾は、もう昔の太子さまのことなどは思つてゐませぬ。それよりか、今の世尊のことを、どんなに尊く思ふことせう。難陀さまも救はれました。阿難さまも救はれました。あのいたづら盛りの羅睺羅ですら、いゝ落着いた子になりました」

ともすれば、過去の夢路へ引込まれようとする感情を、ぐつと呑み下いて、妃

は言葉にはげみをつけた。そして、更に

「お母さま、妾は、お父さまの御臨終を、どんなに有難く思ひませう。さうでした。世尊のお成りになるつい間際まで、あれほど苦しんでゐらつしやつたのに、世尊がお成りになつて、「過去無量の世に於て、私の得たる福德と、更に菩提樹下で得た正覺の神力によつて、今この頭のお痛みを、永へにお除き申すであらう」と被仰つて、お父さまのお頭へ、世尊の御手がおさはりになると、不思議なことには、見る／＼お顔の色がよくなりました。そして、お痛みもすつかり去つたやうでありました」

といひついで。夫人もつい引込まれて、

「さうでした。あの時にはこの妾も、全く驚いてしまひました。勿體ないことですが、あの時までには、わが子といふ思ひがとれないためか、何とはなしに、高い心でゐましたが、あれからはすつかり、世尊のお徳に、ひれ伏すやうな氣にな



りました。あの難陀や阿難までが、世尊の御力によつて與へられた福德によつて今このお痛を除き申さう」というて、難陀は右手を、阿難は左手を撫でましたが、それですつかりお痛みは除れました」と云つて、濕んだ腫を絞るやうにまたぐきつぐけた。妃も、一さう聲をうるませて、母の言葉を受けついだ。

「それから、舍利弗さまや目連さまなどいふ尊いお弟子方が、背や腹や御足をお撫でになりました。そして、お父さまからすつかり病苦が去りますと、今度は世尊が、尊い〜お話を遊ばしました。すると、長の病で弱りきつてゐなさいましたお父さまが、それは〜落着いた明晰したお聲で、「私は今明かに諸法の常住でないことを知つた。私はすべての欲情を解脱した。私はもはや、生死の網にかゝるやうなことはない」と被仰つて、法悦に眼を曇らせながら、しつかりと世尊のお手をお握り遊ばした……」

ここまでくると、彼女の聲は、さすがに鈍つた。その瞳は、感激の露にぬれてわなづいてゐた。夫人の頬も、恵まれたものゝみが持つ潤ひに、はらり〜としたされてゐた。

淨飯王の死、それは實に尊いものであつた。生から生へ蘇つて行く、聖者のやうな死であつた。釋尊の慰問と一しよに、病苦がさつて、それから四五日の間は、身は脱殻のやうに苦悶なく、心は「眞理の胸」に憩うて、すや〜とした経過を示された。殊に、いよ〜臨終といふ時に、病床の中に起き直つて、威儀を正いて釋尊を禮拜し、それから大臣以下を枕邊に召して、幾度も幾度も敬禮して、身口意の三業を謝せられた。「長い間世話になりました。この手、この口、この意、それはずゐぶん難題をかけました。心配をさせました。しかし、それも最後に近づいた。私は、これでこの世をお辭する。どうか、私の罪は容しておくれ。——尊い王位も打ち忘れて、奴隷の前にも額づきたまふ謙虛の光は、まぶしいほどに、家臣たちの胸に射た。そこには、嘗て釋尊の成道によつて恵まれた、生きとし生



けるものゝ生命の權威——男も女も、君主も奴隸も、共に手をとつて、正覺の高嶺に登られるのだといふ、度しやかな同朋の愛が、王と臣とを貫いて、月光の如くに漲つてゐた。それから王は、泣き脹れてをる夫人や妃を呼んで、豫て釋尊最初の歸郷の際に、王へ對してお説きになつた、

起きよ、怠るなかれ、

正しくして、光明ある生活に入れよ、

徳に従ふ人は、

今生後生共に幸福を得ん。

正しき生活に従ひて、

悪しき生活を退けよ、

徳に従ふ人は、

今生後生共に幸福を得ん。

といふ教誨を、懇々とお勧めになつて、「これが私の遺言だ。決して泣くではない。會うたものが別れる、生れたものが死ぬ。それは餘りに解りきつた浮き世の法則だ。さうだ。泣いて生々の迷を重ねるよりか、少しも早く佛道に歸して、世尊の教を奉じてくれ。それが私のたのみだ、遺言だ」と仰せになつて、水の流れるやうに息をとられた。

「お母さま、妾は、もう昔の太子さまのことなどは、夢にもお慕ひいたしません。それよりか、今の妾には、あの、お父さまを、聖者のやうに神々しい臨終へお導きになりました世尊を、どんなに尊く思ふこととせう。城の人たちも、あのお父さまのお葬式のおりに、お棺を擔いで、いづくかと歩せたまうた世尊を拜んで、みなひどく、ひきつけられてをりました。世尊のお姿は、もうそれだけで、救はれたやうに人の心を、ひきつけます。妾は、妾は、もし毎日のやうに世尊のおそばで、あの崇高いおすがたを拜してゐたり、また、清いお聲の御説法を、聞



いてゐたら、きつと、この、濁つた胸がすむでせう、そして、お父さまのやうな、尊い氣分に、救はれることとせうと思ひます」

妃の心は、長い間、亂れに亂れてゐた。しかし、ついに、救はれる時がやつて來た。太子の、若々しい姿に、魅せられてゐた心は、いつのまにか、巍々とした佛陀ぶつだの懷に、抱きとられてゐる。愛のさゞめごとを求めてゐた唇は、今は、歪ゆがめるものを正す真理の鍵として、尊く崇けだかく仰がれる。夕べから、重いく憂悶ゆうもんに壓されてゐた彼女が、一度こゝに救はれると、じつとはしてゐられない、軽い氣分に蘇つて來た。「さうだ、すぐにも出家を願ひしよう。それがお父さまの遺言に對しても、立派な孝行になるのだから」——さう決心した。しかし、また、よく考へて見ると、釋尊が始めて歸城せられた時でも、彼女に取つては、あまりこまやかな態度とは、思へなかつた。また今度の場合でも、可成り長い御滞在であるのに、これといふほどの、御懇情は伺へない。そこに彼女は、幾分のひがみを、持たぬ譯には行かなかつた。それに、釋尊のみ教へは、非常に女事に嚴重で、また、

女の出家といふものも、聞かないし、殊に、自分は本の配遇であることを思つて見ると、さすがに足が、鈍るのであつた。「さうだ、お母さまに相談しよう」——

彼女は、再び、さう決心した。そして、夜ふけではあつたが明日は朝早く、世尊もお立ちになることゆゑ、一大事の前、躊躇は出來ぬと、すぐに夫人の室へ來たのであつた。來て見ると、涙が先になつて、云ひたいことが、はちきれさうに塞がつて、どうにも云へなくなつた。そして、張りきつた涙が、最後の用件だけを刀身やきみのやうに、弾はじき出してしまつた。夫人は驚いた。妃はあはくつて、胸の中を割つて見せた。夫人もやうやく、安堵の色が流れ出た。

「まあさういふことですか。實は妾も、寢られぬ夜半を、ずつと、考へ通してゐたのです。そして、妾も、出家をしたら……などと思つてをりました。妾にも、王さまの御臨終のこと、御遺言のこと、それからそれへと氣になつて、この世のことは、すつかり捨てられてをりました。妾は嬉しい。幸福です。子供によつて尊い法のりを説き示され、今またあなたから、出家を誘はれる。こんな幸福がどこに



あらう。妾も出家します。させて頂きます。世尊ほとけさまの教には、法に、國王もなく奴隷もない、男もなければ女もないと承つてをります。また道心は得がたいこと、優曇華うどうげのやうだとも、聞かされてゐます。女は罪が深い、しかし、救ひの道には二つはない、きつと許して頂けませう。さうです。朝になれば、お立ちになる。もう夜明に間もありませんまい」

夫人の頬には、また涙が流れ出た。しかしそれは、もう悲愁の濁りでなくて、希望に光つた、感激の露であつた。妃もまた、わけなくて涌き来る歡びに、母の懷へ、聲もなく伏しこんだ。

月はますますく冴えてゐる。外には虫の音こゑもない。寂かなく夜だ。中には、心ゆくばかり涙にしたむ、肅々とした聲が、そ、り、ねの如く漏れてゐる。折りから、曉が近づいた。恩愛から菩提の道へ——煩惱即菩提の黎明を、夢の如くに打破る、遠山寺の鐘の音が、しづくと二人の室を訪れる。

## 三

釋尊やその教團の人たちが、故城迦毘羅かびらの尼俱盧陀にくろだ (E. Nigrodha-vana) の旅の宿から、吠舍離べしゃり (E. Vesālī) の重中閣講堂へ落着かれてから間もない、或る麗かな朝であつた。お給仕役の阿難が、精舎てらの門に凭れて鬱々と、物思ひに沈んでをつた。一ぱいの涙を孕んだ彼の瞳は、北の空へ吸着けられて、なやましげに雨とふつた。その中には、三度まで出家を請うて、三度とも拒絶された、波闍波提はじゃはだい夫人や耶輸陀羅やすたら妃の、消えいりさうな悲歎が、蜃氣樓の如く浮かみ出てゐた。

彼はもと、淨飯王の弟の、白飯王びやくはんおう (梵. Suklodana) の子で、釋尊からは從弟に血を引いた。で夫人へは、伯母さまらしい愛を持つたし、また妃に對しては、姉のやうな感じがあつた。至つて狂熱的な性分で、他人の面倒や氣苦勞が、じつとして見過せない、男であつた。しかし常には、女のやうに軟かいものを、周圍の人



のたまいひへ、そつと恵んだ。人々は、肌觸のよい彼の氣質を、氣持よく擁きとつた。いはゞ、誰の前にも、天才的寵兒たり得ること、それが、彼の全體である。

彼の出家は、まだ十八か九の、欲情の燃えざかりであつた。そんな年ごろに、浮世の味氣なさを悶えたり、嚴肅な禁欲生活や重苦しい涅槃思想を、欣求するといふ如き道心は、むろん、あり得よう筈もない。寧ろ彼には、麗かな太陽の下で壯艶な羽ばたきを誇る、孔雀のやうな、宮殿の生活が、遙かに好かれた。しかし、それにも打勝つて、それとは全く矛盾した、出家の生活を、決行せしめた偉大なものは、實に釋尊の成道であつた。「我等の一族より、實にかくの如き一切智勝者を出したり」——こんな情熱が、狂ほしいばかりに彼を縛つて、無我夢中で、教團へ追ひこんだ。これが全く、彼の出家の理由であつた。だから彼には、他の弟子たちに比へると、理性の力素を多量に要する、三明さんみの通達といふやうなことはどうしても難かしかつた。そのかはり、釋尊に對する信念は、持前の美しい情熱

に熔化されて、恐しく強かつた。彼が間もなく、釋尊のお給仕役に選ばれたのも、全くこの情熱のたまものである。彼の運命はどこまでも、感情の強さと美しさに幸ひされて、天才的寵兒の名を、完うさせた。

淨飯王じやうはんの大葬には、勿論彼も參列した。また、尼に俱盧陀くらだの森の宿で、波闍波提夫人と耶輸陀羅妃が、出家を願うて出た時も、矢張り釋尊に侍して、聞いてゐた。彼は最初から二人の心持が、よく解つてゐた。殊に、女人の出家といふ教團あつて最初の重大問題のことゆゑ、たゞさへ昂奮しやすい感情を、一さう昂奮させて、片唾かたづを呑んで耳を濟いた。釋尊は、女には嚴しい、しかし、手を合すものは母である、妻である。彼の膝は、自分のことにもあるやうに、一步二歩、乗り出てゐた。

「瞿曇彌くどうみ(Gotami. 波夫人の姓)さま、決してさやうなことを、如來わたりに申してはなりませんぬ」——果然、佛勅は下つた。しかもそれは、意外にも青天の霹靂であ



つた。綱は断たれた。空は曇つた。忽ち、一縷の光はかき消えて、昏倒するやうな大暴風おほしけが、二人の胸にどよめき渡つた。けれども、二人にとつては畢死の場合である。海嘯つなみの如くに莊重な、釋尊の威儀に怯えながらも、溺るゝものの死力を盡いて、猶もひたすら願ひに願つた。しかし、ゆるしのことばは、ついに出来なかつた。

一座が、死のやうな寂けさへ落ちた時、阿難は、漸く昂奮から醒めて出た。そして、光のやうに充ちてをる佛陀のみ慈悲を意識した。世尊の威容は、不思議に心を落着かさせて、人々のたましひを、春の洋うみのやうに解といて往く。それはてうど、腫物から膿のひくやうな、軽い夢心地の感じであつた。夫人も妃も、胸のこぼはりのありだけを、いつのまにか、世尊の慈悲に吸はれてゐたし、阿難も、軽い氣分に溶けてゐた。そこには、嵐の跡が消え失せて、光の洋が満々と迫つてをつた。——阿難はそれを、今でもはつきり意識して居る。

「どうして女の出家をお聴しないのだらう」——門に凭れた阿難は、溜息を吐いて考へこんだ。釋尊に對しては、強い信念を持つてゐるのであるが、しかしこの問題に就ては、何となく充たされない、齒痒い感じが、深くへばりついて離れようとなかなかつた。釋尊には、凡情で測りがたい智慧がある。どんな場合でも、救濟ひきの契機だけはしつかり掴んで、離されたことがない。だから、今度でもきつと深いお考へがあるに違ひない——太陽に向うて螢光を争ふやうな、淺慕な自分の疑惑を、嘲笑うても見たが、しかしさうする中からも、一さうねばり強く血をひくものは、氣の毒な二人の女性であつた。「いやあの時は笑うて訣れたのだから………涙は出てゐたが、しかし釋尊の御説諭に、非常に感激はしてをつた」——「何だ馬鹿な、當の本人が諦めてをるのに」——そんな感じもした。けれども、何としても忘れられないものが、深くこびりついてゐて、拭けば拭くほど、いよいよ



よはつきり印象を浮き立てた。「さうだあの時は、妃も夫人もこの俺も、すつかり釋尊の御威容に酔つてゐたのだ。きつと今頃は、音樂の陶酔から脱け出たやうな淋しみが、二人の周圍を襲うてゐるだらう」——さう思ふと、擁きとりたいやうな同情が、むら／＼と燃えたつた。そして、二人の救はれる道は、たゞ一つ、出家することだと考へた。

女の出家。教團にとつて、それは實に重大問題であることは、阿難とてもよく知つてゐた。しかし、今の場合の彼は、感情も理性もすべてのものを、二人の女性に縛られてゐた。そして、熱し易い彼の、いちばんに根強く動かされてゐたものは、釋尊にとつて波闍波提夫人が、恩義ある養ひの親だといふことだつた。

吠舍佉(巴. Vesākhā 三、四月)の八日に、藍毗尼(Tambinī)の園の、霞のやうに叢り咲く無憂樹の下で、釋尊は降誕したまうた。園は迦比羅と拘利の中間にあ

つて、摩耶夫人はお産のために郷歸をされる途中であつた。てうどこまでこられると、そこにはすく／＼と茂る無憂樹の大木が、日傘のやうになつて、大きな蔭を造つてをつた。梢には、胡蝶のやうな白い愛くるしい花が、日傘を飾る花の如くについてゐて、すが／＼しい香氣を、一杯に溢してをつた。そして、燃ゆるやうな暑さに、疲れきつてゐた夫人のからだを、香油で洗ふ如くに心地よくした。元氣づかれた夫人は、あまりにに／＼と咲きはこる花を賞でて、一枝手折らうと思つて、右手を高く枝へつけられた。その時、異常が遽かに夫人を襲うて、右の脇から、太子が思ひがけなく降誕せられた——この過去の追憶は實に、生々しく釋尊の胸に焼かれてをつた。……降誕されて七日目に、母夫人は薨逝された。その薨逝は、いたいけない王子の頭に、僅か七日の間ではあつたが、「母」といふものゝ印象を、荆冠の如く鏤りつけた……星のやうに歡びに充ちた母の瞳。そこから露のやうな愛の雫が溢れて、この頬を浸してくれた……火のやうに愛



に熱した母の唇。それは蜜のやうにあまくく、この唇に吸ひついた……うら若い太子の心が、たとへ身の溶けるやうな歡樂の中にあつても、この印象にすぐ眼を醒された。そして、どんな時にも、母のいつた世界に憧憬を募られた。聽て、因明や吠陀などを習つて、宗教——靈の世界といふものを知つた時には、もうじつとはしてゐられない、たまらないほど寂しい氣分に襲はれた。……父や一族の人たちが、華やか耕田の儀式に出かけられた時に、うつろな心を樹下に憩らへて、じつとたましひを凝視めてゐたのも、そのころだつた。……四門に遊んで、思ひがけない人生の破綻に驚いて、急いで歸城したのもそのころだつた。……これらの悼々しい釋尊の印象は、また弟子たちの頭へも移されてゐた。阿難もよくこれを知つてゐた。釋尊をして出家させた強い力は、亡き母の印象だ——とすら考へてゐた。さういふ意味で、釋尊の人間としての一面に、深い理解を、持つてるものと自信してゐた。

——「あまりに母の印象が深いと、繼母に對する愛といふものは出來ないのかしら。それはどんなによい繼母であつても——」  
彼はふと、こんな念ひが頭に浮んだ。醇な家庭に生ひ立つた彼には、繼母の話が恐いものゝ一つに物語られてゐるので、繼母といふ假の形の存在は、却つて子供に取つて反對に、實母の現實の要求を強めるやうなものではあるまいか。さう思へたからである。しかし、この不當な考へは、すぐ熾烈な懺悔となつて、消されてしまつた。——「俺は申譯のないことを考へてゐた。世尊を誘ふなんて、なんといふ恐ろしいことを思つたらう——」彼は麻睡から醒めた病人のやうな、強い苦悶に引きずりこまれた。そして、すぐにも釋尊の御前へ罷つて、懺悔しようと思つて立てたが、心は矢張り、最前からの、問題の中へ捉はれてゐた。

朝の暁は、もう可なり強い光を投げてゐた。風がとまつて、鳥の音も流れて來



ない。阿難は、釋尊の方へ向ける筈だつた足を、反對に、近くの杜へ運ばせた。そして、濕氣しめりけのある岩の上へ、腰を下いた。そこはまだ太陽にも冒あされないで、充分涼を銜あんでをつた。朝露に浸つた阿難の心は、またも馬のやうに迦比羅かひらの空へ驅け出した。

「さうだ、釋尊も繼母の愛といふものは、かねてお話になつたこともある。あの菩提樹の下でお悟りになつた時でも、私は佛陀ぼつてになつた、尊い教法を證悟した、しかし、この法は難かしい、在來の、我々の祖先が傳へた教へ——それは我々の民族の生活にとつて、既に軌範ともなり常識ともなつてをる——に較べて、勝れてはをる、正しくはある、しかし、その勝れやうも正しさも、彼等の常識や信條を、根柢から覆へす性質に出來てゐる——私は、折角悟りながらも、その悟りを人に勧めることを、非常に躊躇ためらうた。説かうか説くまいか。若し説いて信を得なければ、それは徒らに彼等の常識と信條とを、搖がすだけだ。しかも無上の教法

は傷つくのだ——可なりの間苦しんだ。その時、私の眼に浮んで來たのは、父王であつた、母后であつた、妃であつた。それから、縁ある人の惱めるすがたや、また火宅にあつてそれとも知らず戯れる子供のやうに、苦にあつて苦を知らず、無常にあつて無常を知らず、うか／＼と流轉まよひを重ねる一切の人類のすがたが、それからそれへまぎ／＼と、浮んで來た。もう私は忍びきれなくなつた。思ひきつて火宅に飛びこんで、戯れてゐる子を救つてやらう、さうだ、それが佛陀の責任だ、さう決心して獅子座を立つた——獅子座を立つた私は、それから救濟すくひの方法に頭をつかつた、そして、先づ多少思想を持つた人にぶつかつて、自分の教法を試して見よう。さう思つて、いちばんに阿羅邏迦羅摩あらうからま (E. Alila Kṛtima) と鬱陀迦羅摩うつたか子 (E. Uddaka Rāmaputta) を説かうと念つた。二人は、私の修業時分の師で、可なり深い印象を得てゐたからだ。しかし、もうその時二人は死んでゐた。で私は、次に橋陳如けうちんによ (E. Anā Koiṇjāna) 等五人のものを救はうと思つて、婆羅奈



斯國(Virāṣṭi)へ向うて旅立つた。彼等も、最初私が出家した時に、父王の命令で私に隨從して出家したのだが、途中、修道の方法に就て私と意見が違つたために、お互に東と西に訣れたのだが、しかし、私の數多い縁者のなかでは、比較的思想の練れたものである。また、關係が關係だけに懐しみも格別だ。私はそんな理由で、五人のたましひに愛がかゝつたのだ。さて五人に會つて見ると、最初は私を輕侮してゐるらしい容子だつたが、しかし、私が些し法を説き出すと、彼等はすぐに歸伏した。そして説法が終つた時には、彼等の私を信する力が極度に達して、嗚咽をすましてををつた。それから、五人は私の忠實な助法者になつてくれた。それが私の、出家の弟子を得た最初であつた。その後私は、不思議な機縁で、その國の長者の息子の耶舎(Yasa)といふものを、弟子にした。彼は、個性や環境に私とはどこか似たところを持つた、宗教的情操の烈しい青年だつたが、たつた一度、五比丘に説いてる私の説法を聞いて、深く感激にうたれて、すぐその

場で出家を乞うたのであつた。私は快よくそれを許した。私は、一人息子の彼の出家が、どんなに兩親を慎らせるだらうかを、よく知つてゐた。しかし、一人でも眞理の世界へ歸することは、尊いことだ。で、眞理の前に何物をも認めない私は、兩親の反抗を豫期して、といふよりは、既に兩親を説伏する方便をすら考慮して、彼の出家を許してやつた。すると果して、父も母も蒼白まっさかになつて、耶舎ヤシャの取戻にやつて來た。で私は、豫て考へておいた方法で、二人を説くと、二人とも忽ち信者になつて、子供の出家も承知した。それが私の、在家の弟子の、男と女とを得た最初であつた——ここで私は完全に、宗教の大切な要素である三寶(教法と、教法を體驗せる佛陀と、これを信じて宣傳する比丘僧伽の三)を打ち立てた。私はもう何時でも歸城して、父王や母后や妃たちを、救ふことが出来るのだ——さう思つた。しかし、恩愛は最も強い眞理の敵だ。父王たちは、きつと血肉の愛にひかれて、私の教法を耳に容れまい。たましひの救ひより、先づこの家庭を救



へ。さういつて私の肉を食ばらうとするだらう——私は、急いで救ひに往きたく念つた。しかしまだ機縁は、充分に熟れてゐないと氣付いて、更に次の方便を考へた。それは、ほんたうに血肉のものを救ふには、先づ最も彼等の感動し易い問題を起いて、私への尊信を、充分に昂めておかねばならない。そしてさうするには、一方には世俗の權威者を悦脱し、一方には思想界の權威者を歸信させることが何よりだ。——私が三迦葉(E. Kassapa)と頻婆沙羅王(Bimbisāla)とを信者にしてから、始めて歸城したのは、全くそのためだつた……」

阿難は嘗て、釋尊から聞いてゐた「救濟と方便」といふに就てのお話を、こゝまで手繰つて來て、當るべきものに當りついた、飛び立つやうな歡びに、全身が涌き立つた。——「さうだ、世尊は間違ひもなく波闍波提を愛してゐられる」

主觀のみの世界に限られた思索は、それは思索者にのみ許された自由の天地で

ある。勝手に喜ぶことも出來れば、勝手に悲しむことも出来る。そのかはり、喜にも憂にも絶對の價値がない——阿難は、ふとそこへ氣がついた。何だか、都合のよいことだけを考へてゐたやうに思はれて、握りしめてゐたものが力ごたへのない綿だつたといつた、氣の抜けた疑懼に、また襲はれた。「いやこれは自分の空想を充たすためや、享樂のために提供された公案ぢやない。事實はもう、二人の生命までを脅かしてゐるのだ——」もつと着實に、釋尊がほんたうに聽してやられるかどうか、それを考へなくてはならない——彼の疑懼は、いよ／＼息を喘いで迫つて來た。頭は、湯氣のやうにこんがらかつて、ばつとはつて來た。「些し昂奮しすぎたやうだ。そこらを歩いて頭を冷さう——」伴をでも誘ふやうに呟いて、彼は腰を上げた。そして、涼しい風を注いでくれる杜の奥の方へ、歩みを移した。とこの時、彼の神経を電の如くに射て來たものは、釋尊の金言だつた。「駄目だ！」——絶望の聲は、再び彼の咽喉を絞つて、またもとの岩の根へ、い



いらいと引するた。その顔は、曇りも晴れも定めない秋空のやうに、忽ち明るく忽ち暗く、希望の光を曇らせてしまつた。その眼は、それからそれへと映り来る釋尊の譴誡に、脅ゆる如くわなういてゐた。

婦人は永久に友となつてはくれない。富豪が貧者に近づかれることが、てうど自分の財産を掠められでもするやうに恐れる如く、女といふものは、男に金があれば愛しもあるが、無くなればすぐ愛想をつかす。またその心は火焰のやうで、うつかり乗んだら仕損ねる。ただ従順に女の意さへ迎へてゐれば、それで甚だ機嫌がいらが、しかし非常に危険なことだ。だから女と見たら、如何に美しくそつて來ても、中には恐ろしい毒蛇を覆んでゐる花だと思へ。またどんなに優しく柔順に思はれても、それは柔かい灰で覆はれた火だと畏れよ。

淫欲が起つてどうにも耐えきれぬなら、一さうのこと毒蛇の口へでもつきこむがいら。どんな場合だつて、女に觸れようなどとは思ふなよ。それは死よりも恐いことだ。

一度女を見るだけでさへ、永く三途の業を結ぶといつた、恐ろしい執着が起さるのだ。まして、満一犯しでもしようものなら、それこそ無間地獄は的面だ。永久に道心は回復出來ぬぞよ。

女と交通しちやいけない。また話しちやいけない。若しそれが實行出来るなら、おまへは女によつて受けるいろ／＼な災難から救はれよう。

女にはいろ／＼な武器があつて、どんな男でも降伏せしめる力を持つてゐる。



或る者はなやましい容姿みぶりをして、ふらくと男を抱きつかせる。或者は魂をうばふやうな笑ひでもつて、男のからだを溶かしてしまふ。或者は蜜のやう言葉を以て、どんなに意志の強い男でも甘くする。それから或者は身をそくる涕泣すいりなきで、或者は齒の根も浮き立つ歌謠の力で、或者は盛装を凝し、柔かい姿態を投げかけて、きつと男を捕虜にするのだ。だから、萬一女に觸れなくてはならない、餘儀ない時は、あの戰場に立つ勇敢な武士の意氣込で、しつかり心を締めてから行け。

阿難の顔は、神経そのものゝやうに、蒼白まっさをにふるへてゐた。婦人に關して誠められた一々のお言葉は、聲聞中多聞第一とまでいはれた、さすが記憶のいゝ彼の頭にも、一つとして婦人に同情あるものはあり得なかつた。皆、恐しい針の鋭さと焰の熱さを持つてゐた。けれども、彼にとつては、何だかそこに逃げ口のあるやうな、行詰つた時にも餘裕ゆとりある氣が、胸の中でこみあげてゐた。佛の譴誡はい

かにも熾烈だ。女の存在は罪惡そのものゝやうに呪はれてゐる。しかし、それらはみんな男の弟子たちへの誠めである。それが直ちに女自身の罪だとは、誰がどうしてきめられよう。そんな氣がむらくと起つてならなかつた。淫欲の怖ろしいといふに就て話された、刀葉林地獄の物語。僑薩羅けうさらか(E. Kosala)の旅路で、立木の燃ゆるを指さして「寧ろこの身を火中に投じようとも、女子とは交接する勿れ」と、あるお弟子に誠められたといふ話。それらも勿論彼には解つてゐた。しかし、さう誠められる心持は、絶對的に女と交つてはならないとふ意味ではない。それはいつかの、「是非餘儀ないことでは家に往つて、婦人を相手に説法でもせなくてはならないといふ場合には、老年の婦人を見ては母と想へ、中年の婦人を見ては姉妹と想へ、少年の婦人を見ては子女と想へ」と云はれた、お言葉によつても明かだ。だから、女の怖しさといふのも毒々しさといふのも、寧ろ男の方に、それに虜へられるだけの弱いものがあるからだ。そこには些しも女自身の罪



はない。却つて、男が自分の弱いものを女の方へ轉嫁しようとするだけ、それだけ男の方に罪があるのだ——かう思ふと、もうどこにも女人の出家を拒まねばならないといふ理由が、見出せないやうな氣にもなつた。その時、彼の昂奮はまた可なりに昂まらうとしてゐたが、しかし記憶の中には、まだ他の多くの婦人觀を、釋尊から聞かされてゐることに氣がついて、もつと落ちついて考へようと努力した。

けれども、記憶の事實はどの場合でも、必然性と絶對性を以て女人の出家を拒んでゐるとは思へなかつた。

釋尊は、女自身の缺陷といふものをも、時々指摘はしてをられる。しかしそれは、多く婦人の心理的作用や性的傾向の問題で、寧ろ女自身の修養上の心懸として説誠されたものである。決して生命の本質までを、卑下されたものではない。女の感情は裸體の如くに見酷しい。妬く、瞋る、罵る、呪ふ、つんと鎮しこみ、

言葉に毒を持つ、虚榮が強くて、物慳みをする——それは實に陥り易い缺陷に相違ない。しかし、そこには社會の制度と教育の問題が、多量に罪を分擔してよいものがある。しかもそれが、男の主權によつて裁かれてゐるとしたら——實に氣の毒な者は女である。もつともそこには、たとへ完全に社會の制度と教育が、女のために解放されて、一切の習慣本能といふものが淨められても、しかしまだどうしても取りきれないものもあるだらう。それは、女といふものに特に賦與された感情の強さであるが、しかしもう醜くさを失つて美しい露を含んだ、玉のやうな洗煉を経てゐる筈だ。醜い煩惱こそとうとい善提を産む筈だ。もしさとりが人間でなくては求められぬといふならば、この女に容された強い感情こそは、やがて佛陀を信する強い信ともなり、また善提を完成する糧ともなるだらう——若しこの強い感情までが、本質的な罪惡だといふならば、それはあまりに虐たらしい。さうだ、その感情こそは、佛種を育くむために造られた、女に取つての特權だ。



——その昔、男と女といふ二種の形の人間が、この地上へ産みつけられた。二人は、身體の作り方からが、すつかり異つて出来てゐた。それは、決して或る一部の大きな違ひ目ばかりでなく、肉のつき方、からだの香、それからいろいろ細かいところまで、すつかりかはつて作られてゐる。ひとりからだのみでなく、心の作用までが、互に違つた特色を持つてゐる。そのいちばん甚いのが、男は理性が強く女は感情が強い、といふことだ——この二いろの存在は、實に地上の永久の謎である。しかしそれは、物好きな神々の悪戯では、決してなかつた。

彼等はその初め、無限といはれ絶対といはれ、一といはれる生命の、兩面であつて、一面を理性と稱へ他の方を感情といつてゐた。ところが、この二面が、互に一の二面であることを忘れて、互に交錯しあうて、そこに知といふ子供を作つた。知は兩親といふ二つの存在を見て、一と知らずに二と認めた。その時初めて

相對、有限、差別などといふものが造られた。然し新たに造られたものは、決して彼等に幸を齎さなかつた。母の感情は盲目だつたから、知は手を取つていろいろと教へてやつた。これは熱いもの、これは冷たいもの、これは傷つけるもの、これは愛すべきもの……この對立の覺りは、感情をして初めて恐怖の情と苦痛の思を持たしめた。そして、自分の氣に入る方へ頼らうとする、弱い心も出来て来た……一方父の理性の方は、眼はあいてゐたが、そのために對立があまりに明晰見えすぎて、却つて妻の感情を、酷使するやうになつたので、この頃から二人の間が、兎角圓滿に往かなくなつた——感情が奇麗な花だと云へば、理性は中には毒がある、觸つちやいけないと押しめる。感情は温かい火だと云へば、理性は火傷をするから寄つてはいけぬと小言をいふ。その癖、理性の方が、これが利益だと見ぬいた場合は（彼はその明るい眼で甲と乙とを内部から見別けて、そこに利益といふものを發見することが出来た）どこまでも感情を追ひ立て、利益の



獲得に苦心した。争ひとか戦さといふものが、初めてそこから産れ出た——尤も時には、妻の感情の方が強氣になつて、自分で美しいとか快よいかいふものを感ずると、夫の理性を顔の先で驅使して、危険とか損害といふものを、全く度外視するやうなことも、ないではなかつたが……そして、この夫婦の關係は、その後甚だしい複雑を來たして、八萬四千種の交渉をすら起すやうになつて來た。しかもその一々の交渉は、恐しい忍苦と争闘を、豫期せねばならない破目に陥ちてゐた。で、時には二人が妥協して、凡ての争ひから遁れようとすることもないではなかつたが、しかしそんな場合には、單に一時的な睡眠といふ状態になるだけのことだつた……子としての知にとつては、それは甚だ心苦しい耐へがたいことだつた。でどうにかして、圓滿にしてやりたいと苦心して、それから深く考へるといふ癖を養うた。その結果、事の起りは、一が無理に二になつて、そのために二人がいやでも交錯せねばならない運命に、取りつかれてしまつたのだといふこ

とを、彼は臆氣ながらに發見した。そして、その交錯を業(Karma)と名けて、これをなくすることがもとの一に還る、唯一の方法だと知つた。それから、懸命になつて業退治にかゝりはてくる——この業の問題を解決すること、それが實に地上へ投げられた兩性の、永久の謎である。だから兩性の存在は、この謎を解くことによつてこそ、始めてほんたうにその意義を全うする。

——ところで、彼等は自分たちだけの謎を解くためだつたら、別に異つた形を取らねばならぬ必要も、なかつたのだが、しかし世には、彼等以外にも無限の謎の子が苦しんでゐて、しかも、それらは凡て人間の形にまで翻譯されて、初めてその使命、謎の解決が出来るのであつたから、彼等先覺者としては、この後輩の謎の子をも、大いに人間の世界へ紹介してやりたい、といふ志願を持つてゐた。そして、そのためには、理性と感情の交錯の軌範にならつて、各々異つた形を取るが便宜だといふので、かくは男女兩性の型を持つに至つたのである——さうい



ふ意味で、彼等兩性の異なるものは、單に目的完成上に分擔しあうた、義務履行の上の廻避しがたい約束手形だ、さう思へばいゝ。だから、そこには少しの差等もない、尊卑もない。寧ろ姿に於ても心理に於ても、またその行爲に於ても、異つたまゝに同格同権の評価が得られる筈だ。このことは兩性の差異といふものを仔細に檢覈してみると、一さう明晰はつきりする。まづ心理作用の上から見ると、女は感情が強いといふが、しかし男にだつて感情はある。男は理性が強いといふが、女にだつて理性はある。たゞその作用する傾向が、特殊なだけに差異が立つ……また生理作用にしたつて、男のもつてゐるだけのものは女に、女の持つてゐるだけのものは男に、きちんと符合してついでをる。たゞその作用の傾向が、女は女に、男は男に、各自特徴を持つてゐる。てうど、男も女もある性液をその皮膚から分泌するが、男は女のを女臭いといひ、女は男のを男臭いと嗅ぐやうな状態に——もし、或る一部に極端な差異があるとしても、それは一を二に還源する、いはゆる分

擔せしめられたる義務の遂行上に必要な、大切な要件だ。だから異りたるまゝの二の形が、當然同じい意義で價值づけられる譯である。更に異りたる二個の形式が、本來目的完成上の義務として分擔したる手形だとすれば、彼等はまた當然目的の獲得及びその方法——この方法は直ちに人生生活そのものだ——の上に就ても、同じい権利が賦與されてゐなければならぬ。否、同じい権利が當爲として各々に主張し得られる筈だ。

——女の強い感情は、決して本質的な缺陷ぢやない。寧ろ佛種を育くむ大切な要素として、男の理性と共に約束しあうた、完全な特權である。

阿難は熱するまゝに、こゝまで論理を辿つて來ると、その結果、ますます、女人の出家を拒まねばならぬ論理的根據が、砂濱に生えた川原菊のやうに、弱いものだといふことを、かつちりにつき止めた。そして、十二年の以前に釋尊が、



摩伽陀國の菩提道場に悉有佛性の秘論を掴んで、驚異し歡喜したまうた光景を、今さらの如くに仰ぎ見た。感傷的なその胸は、もう一ぱいに泣けてゐた。

……一切衆生悉有佛性。それは實に釋尊の靈光によつて照し出された、いのちあるものゝ權威を意味する。神仕する家柄と弓矢取る氏姓、名もなき職業階級と驅役に活きる奴隷の身分。浮き世は、そこに越すに越されぬ牆を設けた。しかし誰あつて、松に燃ゆる焰と、樺に燃ゆる焰とを、見分けることが出來ようか。尊き身、智慧ある身、富める身、善ある身にも、生命の焰が燃え立つた。卑しき身無智なる身、貧しき身、惡ある身にも、生命の焰が焰え立つた。しかも皆んなが、姪、怒、痴の風に煽られながらも、燃えよう燃えようと焦つてゐる。この焰、この慾求のいづこにか、尊卑貧富が立てられよう——「奇なるかな、奇なるかな、一切衆生に秘められたる、不可思議の靈光よ！——もう阿難は耐へきれなくなつて、ちつと瞳を塞いで泣きに泣いた。泪は止めどもなく頬に傳はる……さうだ、君主

と奴隷、敵と味方が手に手を取つて、久遠の友よと容しあふ、涙含ましい感激が、世尊によつて恵まれたのだ。否、人間ばかりの恵みぢやない。狗子のたましひにも、草木のいのちにも、等しく權威が恵まれたのだ。幸福、幸福、幸福！こんな幸福がどこにあらう。感激、感激、感激！これが感激されぬでどうしよう——忽ち阿難の涙には、生命解放の感激が、映畫のやうに映らうて來た。

……傘蓋の如くに垂れ蓋ふ壯緑の菩提樹。天華の如くに郁る純白の花。空は瑠璃と澄み、地は歡びに涌く。これぞ、惡魔降伏の後の森として音もない寂かな寂かな道場の景である。折りから菩薩(釋尊)は、すうと幽かに瞳を閉ぢて、軽くかゝるく、大寂定に沈んで行かれる。すると世界も、夢心地に寂靜の境地へ吸はれこむ。まことに、苦もなく熱もなく諍ひもない平和な洋だ。その時突然、驚天動地の光景が、菩薩の身をば中心として、全宇宙に漲り亘る。菩薩の光顔が巍々として暉き出すと、やがてその全身の一々の毛孔から、赫々として光明が照り出



した。こはそもと思ふ間に放たれた光明は、全宇宙に向うてさつと流れる。しかもその一々の光明は、全宇宙の生きとし生けるものゝたましひへ、矢の如くに射こまれて行くのだ。すると、射こまれたたましひの、一々からは、また無量百千の光明が、各々毛孔を通して放たれ出した。そして、再び菩薩の毛孔を通して、その生命へ吸収される。しかも、獨り菩薩へのみではなくて、また彼等たましひの持主相互の間にも、この光明の交換が、開かれてゐるのだ。かくしてしばしは廣大な全宇宙が悉く、光明と光明の交錯で、光そのものゝやうに照り映える。そこには、菩薩もない、人もない、狗子もない、すべての生あるものはたゞ、一つに溶けあつてをるのみだ。間もなく、いづこからともない狂喜の歌が、またも全宇宙に向うて擴つて行く。鳥の聲、蟲の歌、動物の感激、人類の讚歌。世界は忽ち菩薩を軸にして、光の海に感激の歌を浮ばせながら、車の如く廻轉しだした。

この莊嚴こそはげに、釋尊の成道さとりによつて久遠くわんの權威を賦與された生きとし生

けるものたちの、歡喜に充ち、感激に昂ぶつた、涙含ましくも度しやかな、生命と生命の交響樂に外ならない……さうだ、こゝにも既に、女人は救濟されてゐたのだ——阿難は漸く、もとの思索の道へ辿りついて來た。

その時彼の頭へふと、釋尊の教化的態度といふことが、浮び出た——

人はみな、凡ての對立から解放された生命の權威を、備へてはをる。けれども、彼等は無智なばかりに、それを少しも知らないで、徒らに相對的に執着しすぎてゐる。誰しもの生命に燃ゆる焰はみな、姪怒痴ごんごの業風ごんごうで、絶えず脅かされてをる。そこで業風ごんごうを甚く恐れる。しかしそれを、外から吹いて來るとばかり思ひこんでゐるために、そこに自ら他人との間に於て、墻を設ける本能を、生み出した。この本能は、やがて鬭争を起し貧富を造り、階級といふものまでを拵らへて、互に自分の領を守り立て、これで大丈夫生命の脅威もあるまいと、思つてゐるのだ。ところが、何ぞはからん業風は、彼等自身の胸中に、渦の如くに起つてゐるのだ。



さうだ、如來わたりは、この道理をよく教へてやつて、眞に彼等の生命を、光輝あるものにしてやらう。それが、佛陀としての責任だ。

——といふのが、釋尊の宣傳意志の源である。けれども、實際的教化態度になつて來ると、又をしばらく鞞きんに收めたやうな、あまり原理を表面にまで押し立てない、柔かいものを示される。即ち、社會の習慣、制度、傳統、法律といったものは、云ふまでもなく多くの缺陷と、不合理とを持つてはゐるが、しかしそれは人類が歴史のポイントに立つて、社會的生活をせねばならないやうに、約束づけられてゐる以上、餘儀なくそれは、認めて行かねばならないことだ。そして、徐ろに次の完成された世界をば、自分自らの手で作り出すやう、力めることが大切だ。で、弟子たちでも、家に在つて社會生活をなすものは、現在の社會そのものに、隨順するのがいふだらう。たゞ、教團へ入つたものだけは、絶対にその規定を奉せねばならぬ。——この極端なる現實否定の釋尊にして、しかもなるべく直

接に、外部の形式にかゝはらぶて、社會問題に觸れないで、遠いところから、即ち一べん、社會單位(個人)の心魂の、改造を通してその上に、初めて社會問題に響きを傳へる、といふのが釋尊の偉大な方便教化の在すところだ——と阿難に思はれた。この考へは、いたく胸へ喰ひこんで、そこに何だか、女人の出家が許されない、秘密の鍵があるやうに、しきりと彼に氣になつた。

彼は先づ、嘗て釋尊の譴誡したまうた、女に關する教化の中で、世間の制度や習慣と、一致するものを拾つて見た。

「女子は汚穢なり」とは、數々宣ふところであるが、夜糞吠陀ヤジニ・ヴェダ (Yajñ-Veda) は「女子は汚濁なり」とも、「汚濁の神に合祀せらるるもの三あり、骰子さいと女子と睡眠となり」とも云つてをる。

また、女の十種の災難を擧げて「一に、生れても父母喜ばないし。二に、育てるに大切にせない。三に、嫁に行つても、若しか禮をかくやうなことをなさぬかと、



始終親が心配をする。四に、到る處で娘のためには、両親が氣兼ねする。五に、生涯を生みの両親と伴に出来ないで。六に、他人の家に厄介にならねばならぬ。七に、妊娠せぬと、遂には離縁も受けねばならぬのに、而もそれが思つたからとて出来るものぢやない。八に、子を産む時には、男の想像も及ばぬ苦を受けて、ともすれば命を奪られる。九に、始終夫主の機嫌を損ねぬやうにと、氣を張りつめて。十に、それで生涯自由が得られぬ」とお説きになつたが、これは麻奴の法典(Minava dharmasāstra)で強いられた、女性の上の桎梏である。その中には、「婦人は終身、父兄の與へたる夫に、服従すべし、夫死せし後は、その徳を汚す勿れ」「女子は、日夜男子に従屬して、止住せしめざるべからず、若し又情慾に迷ふ傾向あらば、特別の監視の下に置けよ。」「夫は如何に道德なく性行の修まるなきも常に神として崇めば、貞節の婦といふ」などと、徹底的に夫の従屬に附してある。また、「女子は母たらんがために神之を造る」と定めて、「若し十ヶ年間妊娠をせず

又十二ヶ年間たゞ女子をのみ生み、若しくは十個年その生みたる子育たざれば、妻去るべし」と強制してゐる。殊に甚く符節ひどの合ふのは、三従の説である。麻奴は「女子はその幼時と成年と年老いたる時とを問はず、一切の事、假令家庭にありても獨立に之を行ふ能はず、女子は幼時にありては父に従ひ、成年に至りては夫に従ひ、夫死しては子に従ふべし、女子は到底獨立の自由を得べきものにあらず」と規定したが、釋尊はこの世態を認めて「小時父母に障さえられ、出嫁して夫主に障えられ、老時には兒子に障ゆるる」るが女だと、云つてをられる。

——この事實は、果して何を語つてをるだらう？阿難は凝つと、哀れなるもの運命を、凝視みつめずにはゐられなかつた。

彼はこの事實に就て、二重の意義を考慮した。その一つは、かの釋尊の教の中には、隨分從來の哲學や思想が織込まれてゐるやうに、これも亦、動かすことの出来ぬ、決定的な釋尊の、婦人觀ではなからうか、といふであつた。しかし、他